



企画展解説書  
沼津藩の人材  
沼津市明治史料館

目次

カラー口絵……………1

ごあいさつ……………9

沼津藩の家臣団／家老……………10

重臣たち……………11

側近の実力者……………12

吏僚たち……………13

武術家……………14

儒学者……………18

洋学者……………20

藩医の人びと……………22

文人たち……………24

菊間藩時代の人材……………26

廃藩後・明治～大正期の活躍……………28

史料「沼津・江戸・大浜・五泉御家臣姓名録」……………34

付図・沼津城藩士屋敷割図……………42

協力者一覧……………44



水野助左衛門其敬(?)肖像  
(水野襄二氏所蔵)

其敬は、御用人・御年寄などの重職につき、主に二代藩主忠成のときに活躍した人。従来、鈴木姓であったが、その功により文政13年(1830)水野の姓を賜った。弘化3年(1846)没。正確には、これは誰の肖像であるのか不明だが、水野(鈴木)家中興の祖である其敬ではないかと考えられる。



菅野源右衛門源繁共  
寛政改元巳酉時年四十六歳

菅野源右衛門繁共肖像  
(菅野要吉氏所蔵)

江戸勝手・御勘定奉行などをつとめ、初代藩主忠友に仕えた。享和元年(1801)4月没。

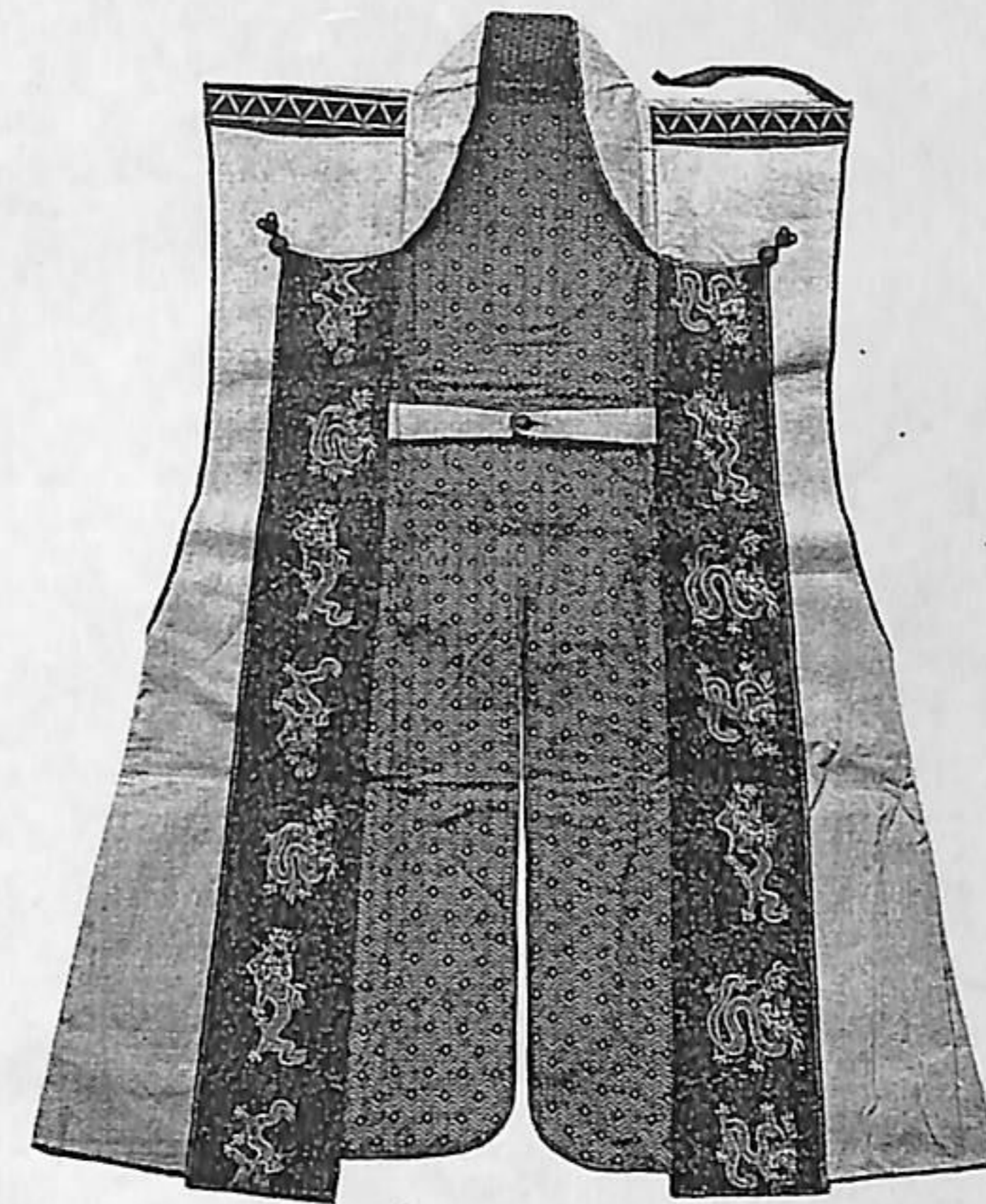
表紙解説

- A 鈴木重雄(中央)(鈴木二郎氏提供) 菊間藩施政などをつとめた重臣。
- B 手島精一(『手島精一先生伝』より) 明治3年アメリカ留学時。22歳。
- C 酒井門太夫(酒井俊司氏提供) 慶応2年55歳。納戸頭取勤役。
- D 水野春四郎忠善(田辺俊一氏提供) 沼津藩主の分家(旗本)当主。慶応4年17歳。
- E 田辺四友(中央)(田辺秀雄氏提供) 俳号を瑤草庵四友という。
- F 鈴木重雄(中央)(鈴木重久氏所蔵・安藤千代重氏提供) Aに同じ。





阿部千万多肖像  
 (阿部照氏所蔵、本間美術館保管)  
 顔の傷は、沼津藩士の反対派刺客に襲われたときのもの。



陣羽織



袴



鎖帷子



7代藩主水野忠誠手製の花筒



旗指物

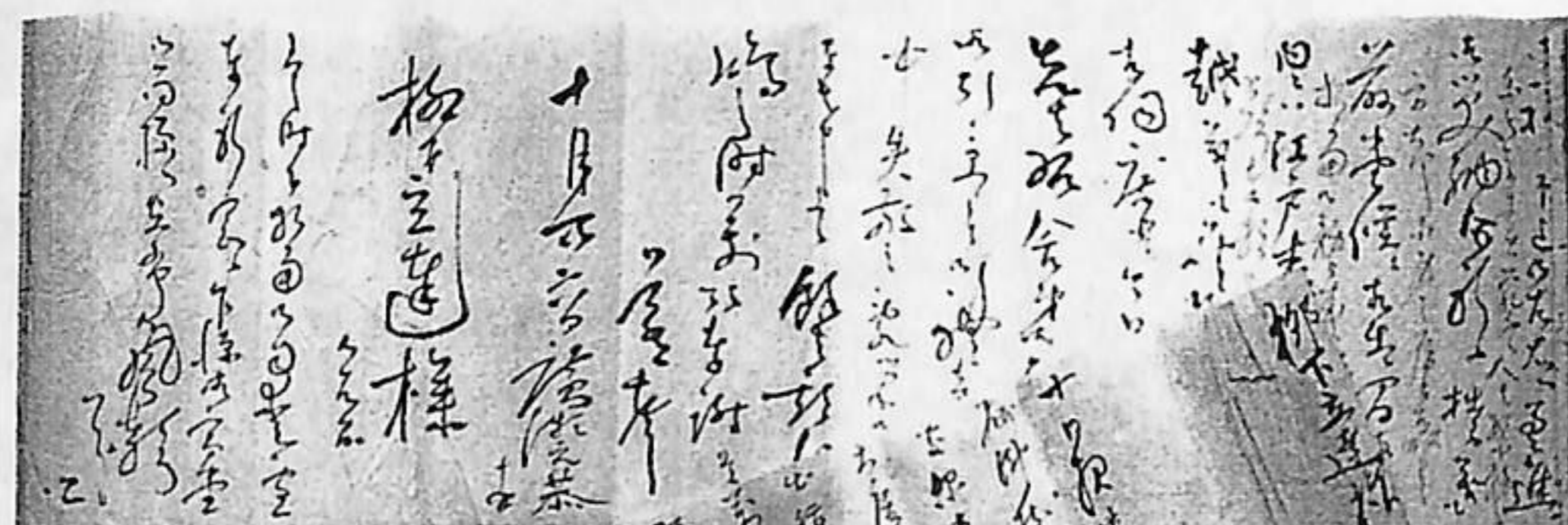
沼津藩士 酒井門太夫の遺品 (酒井俊司氏寄贈)



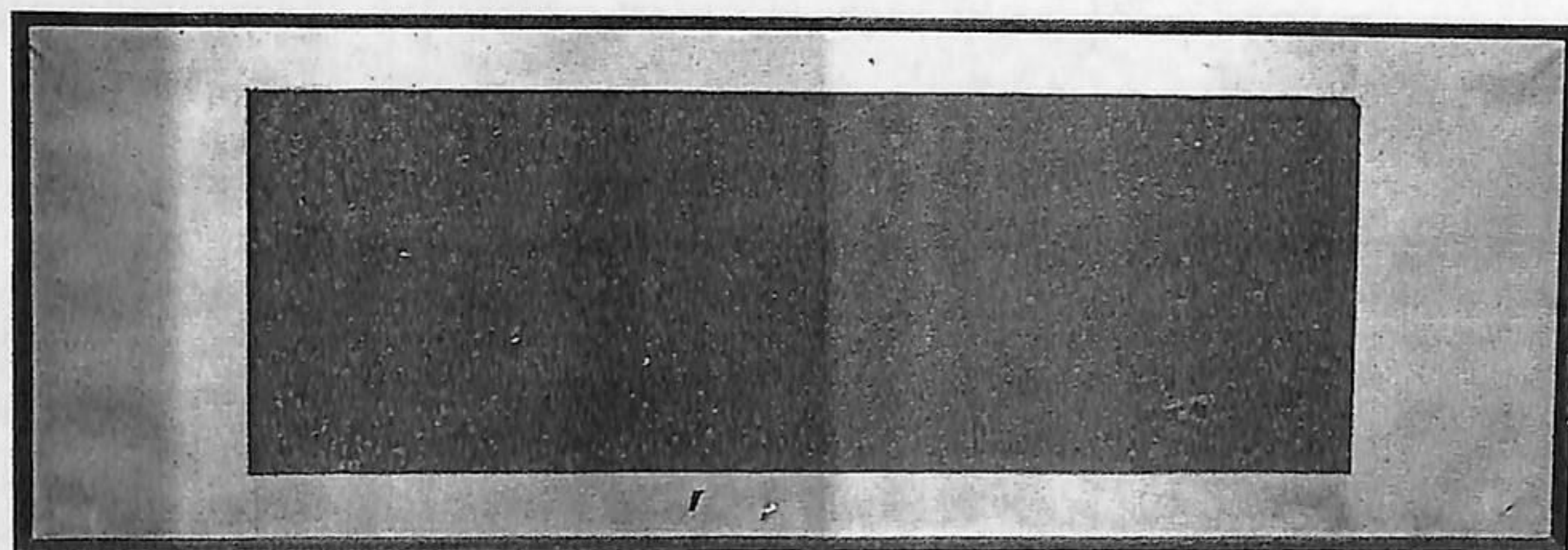
ヒポクラテス像  
(柳下知一氏所蔵)



柳下知之  
(柳下知一氏所蔵)



蘭学者広瀬元恭・大槻俊斎  
から柳下立達へあてた手紙  
(柳下柳平氏所蔵)



2代藩主水野忠成書「梅竹家」(柳下家の書斎号)  
(柳下知一氏所蔵)



島津東陽木像  
(島津祥次氏所蔵)

彫刻師芹沢舟仙作。舟仙は文政期に沼津に来住した人で、江戸の彫刻師舟月の弟子。藩主水野氏に召されて馬の彫刻を作ったこともあった。



祐乗坊瑞巖(汶清)座像  
(祐乗坊瑞満氏所蔵)  
沼津藩医師。安政4年(1857)  
62歳で没。



菊間藩大助教辞令  
(深沢溥氏所蔵)



本山漸訓点・明親館蔵板『格物入門』  
(当館所蔵)



鈴木謙斎画  
(沼津市歴史民俗資料館所蔵)



加藤善右衛門肖像  
(加藤佐氏所蔵)  
讃歌は師の鬼島広蔭である。  
面ざしに見えて勇まし君がため  
いそしかりけむ中の心も



文政天保弘化年間壺中断琴六々文漫図  
(山崎英彦氏所蔵)  
山崎正處が、文人仲間の集まりを描いたもの。四友・閑鷗・雲臥といった沼津藩士の名前も見える。



壺中庵寥鷲こと山崎正處肖像  
(山崎英彦氏所蔵)  
脱捨てすすしくなりぬ  
からころも



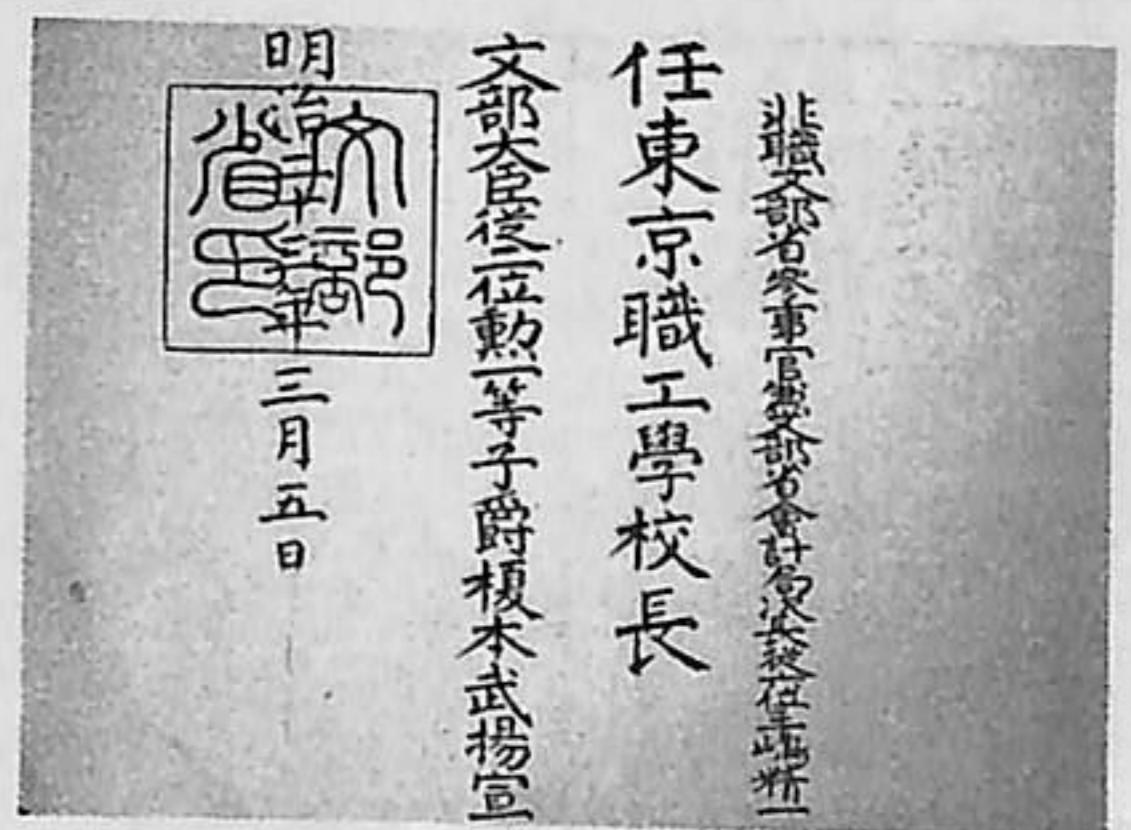
手島精一銅像  
(東京工業大学内)



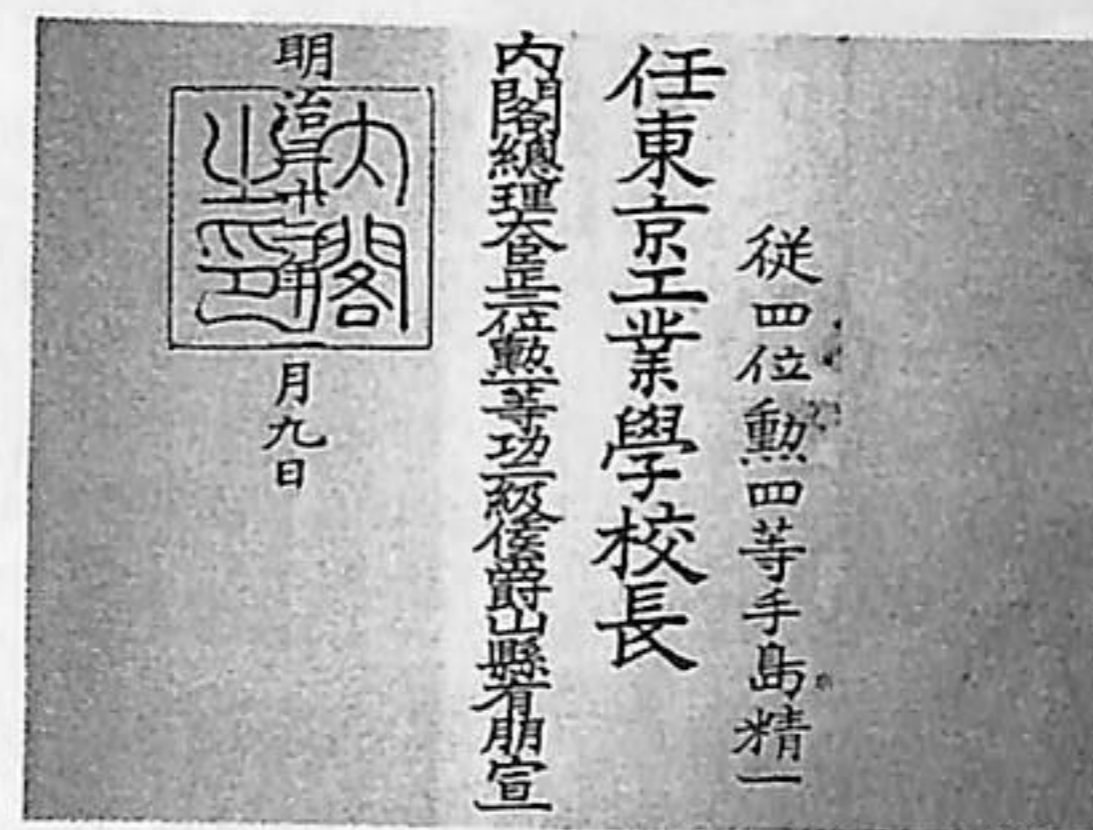
手島精一肖像  
(東京工業大学百年記念館所蔵)



手島精一書  
(東京工業大学百年記念館所蔵)



東京職工学校長辞令  
(同上)



東京工業学校長辞令  
(同上)

### ごあいさつ

本書は、八月一日より九月二十九日まで開催することになりました企画展「沼津藩の人材」の解説書として刊行するものです。ささやかな冊子ではありますが、これまで未公開の史料や史実をたくさん盛り込んでおります。

安永六年(一七七七)から慶応四年(一八六八)まで存続した沼津藩は、五万石の小藩でしたが、藩主水野氏が幕府の閣僚として活躍するなど歴史上顕著な足跡を残しております。一方、藩主の活躍を支えたその家臣団の中にも優れた人物が少なくありませんでした。今回の企画展では、藩政・学問・武道・芸術などの分野で業績を残した沼津藩士と、明治維新後転封された菊間藩での人材、さらには廃藩後明治・大正期において活躍した沼津藩出身者についても紹介します。本書は、同テーマの図録・概説書として広く利用していただければ幸いです。

企画展開催および本書刊行にあたり多大な御協力を賜りました沼津藩士の御子孫をはじめとする史料提供者・情報提供者の皆様に対し、厚く御礼申し上げます。

一九八九年八月一日

沼津市明治史料館

館長 小野 隆雄

## 沼津藩の家臣団

沼津藩は、安永六年（一七七七）、それまで三河国大浜藩として一万三千石を領していた水野出羽守忠友が移封されたことよって成立した。当初領地は二万石だったが、初代藩主忠友は田沼意次の部下として勢力をなし、二代藩主忠成は將軍家斉の寵愛をうけ文政から天保初期にかけ老中首座として権勢を振うなど、藩主の幕閣における活躍により領地も次々に加増され、文政十二年（一八二九）には五万石に達した。これに伴い、家臣の数も増加し、その組織も整備されていったものと思われる。

慶応三年（一八六七）の「御家臣姓名録」（巻末に収録）によると、五百七十八名の藩士が記されている。また、明治元年（一八六八）七月十日付の民政裁判所への報告によれば、沼津・江戸の藩士の世帯数は五百八十七軒、男女人口二千六百九十五人であった<sup>①</sup>。さらに、明治四年（一八七二）菊間藩廢藩当時は六百四十四戸であったという<sup>②</sup>。

家臣は、家格・禄高・役職などによって上下関係が分けられていた。家格や役職については、時期による変化があったと思われるが、一例として巻末の「御家臣姓名録」を参照されたい。ちなみに、明治維新時での調べによると、馬廻席以上の上士は百三十余戸、小役人席以上の中下士は二百三十余戸、職人席以下の軽輩は二百七十余戸である<sup>③</sup>。また、明治四年十一月の廢藩時では、士族百九十一名、卒族四百五十三名となっている<sup>④</sup>。

① 沼津市誌編纂委員会編『沼津市誌』上巻（一九六一年）。

② 中山長明編『旧菊間藩士人名録』（一九二二年刊・一九八一年複製）沼津市立駿河図書館。

③ 岡田寅三郎編『菊間藩士録』『市原地方史研究』第五巻（一九六八年）。

## 重臣たち

家老に次いで藩の最高指導部を構成した重職に年寄がある。これは数かずつ置かれたが、清水・五十川・浜島・水野・鈴木・杉山・黒沢といった三河以来の老臣数家によって占められていた。城代は、藩主に代って沼津城を預かる重職で、最初は江戸家老に対する国家老とも呼ばれていた。また、御側御用人という役職も上級家臣にあてがわれたものであり、やがて家老や年寄に昇進していくべき若い重臣たちの登竜門となっていた。このように、藩の主要な重職は譜代の門閥によって固められていたといえる。



土方 功

（鈴木重久氏提供）

旧名二郎。家老土方家の分家で、丹下・葎の名を世襲した家の沼津藩最後の当主。父葎の次男。元治元年（1864）家督を継ぎ、慶応3年時点では御番士だった。明治3年（1870）菊間藩常備兵嚮導となり、のち木更津県・千葉県に奉職。



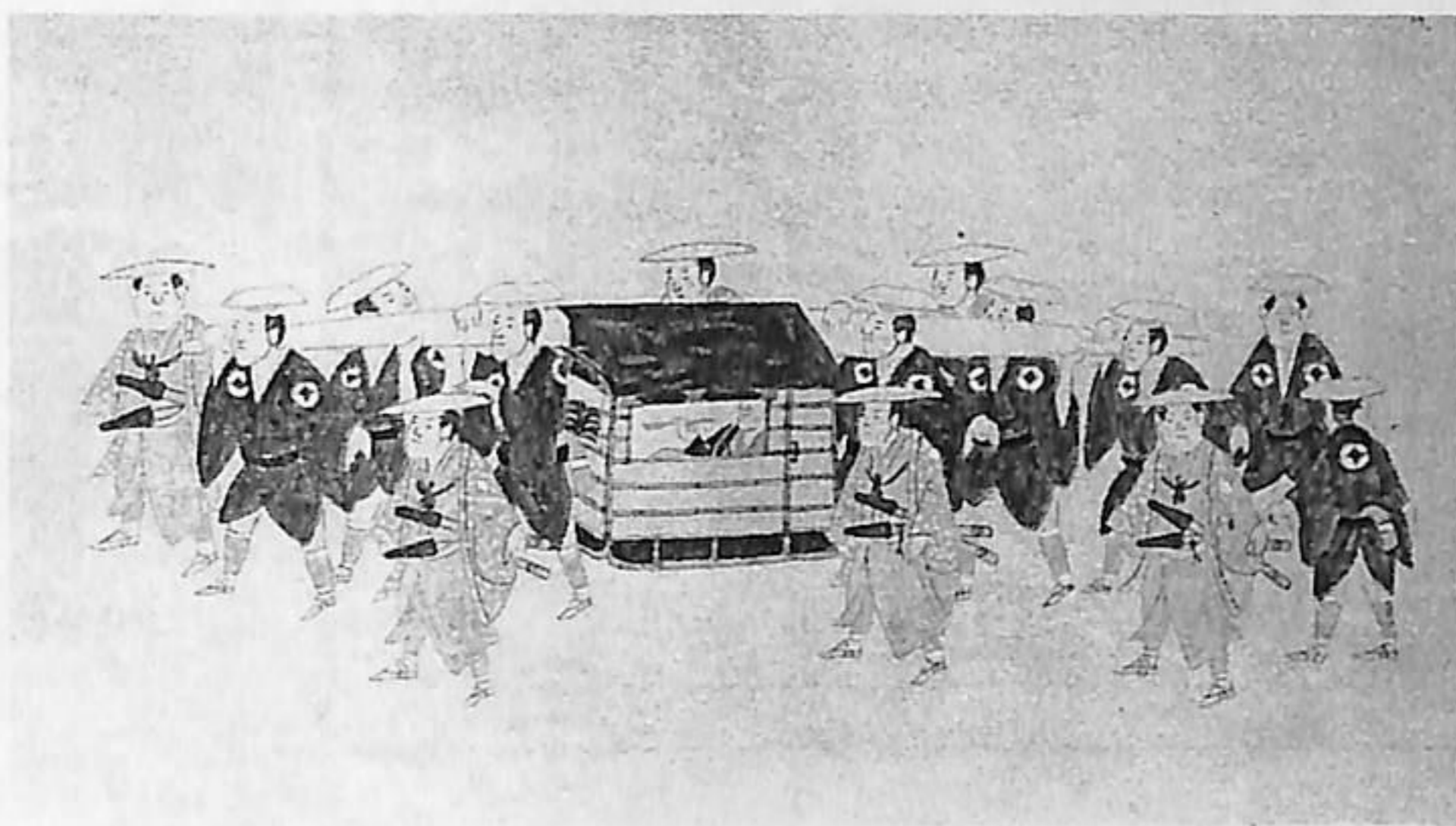
土方 実

（鈴木重久氏提供）

旧名斧次郎・淳夫。天保15年（1844）鈴木重郎左衛門輕鷗の次男として生まれ、万延元年（1860）家老土方家の分家で御側御用人をつとめた土方留之助（素堂）の養子となる。実兄に鈴木重雄がいる。慶応3年（1867）時点で御近習をつとめていた。

## 家老

家臣の中の筆頭はいまでもなく家老である。安永九年（一七八〇）より文政三年（一八二〇）まで家老をつとめた土方縫殿助祐因は、忠友・忠成を補佐し、主人の立身を助けた。その子で、やはり家老職を継いだ縫殿助も、忠成の全盛時代に活躍し、七百石の大身になった。忠成が幕政の実権を握った文政から天保初期において、その家老土方縫殿助父子も隠然たる勢力を擁し、江戸の政界で名を馳せたのである。江戸政治史において一時代を担った忠成と土方の権勢ぶりについては諸書を参考されたい<sup>①</sup>。



土方縫殿助の駕籠

（西尾市立図書館所蔵「駿州沼津水野出羽守入部行列」）

土方家のほか、初期には杉田伊太夫、清水兵左衛門といった人物も家老をつとめたことがあったが、その後は土方家が独占的に世襲している。

① 辻真澄「土方縫殿助について」

その一・三「伊豆史談」一一六

一八八号（一九八七・八九年）

北島正元校訂『不揚録・公德辨・藩秘録』（一九七一年）近藤出版社）など。

版社）など。



酒井門太夫重固

（酒井俊司氏提供）

酒井家も松本以来の旧臣で、代々門太夫を世襲。重固は幕末に御納戸取締などをつとめた。この写真は慶応2年（1866）55歳のときのもの。明治4年菊間で没した。



服部純平方信

（松永礼三氏提供）

浜島猪兵衛の子に生まれ、服部家に養子に入る。初名広人。幕末には御番頭や御側御用人をつとめ、明治4年（1871）73歳で没。息子純は葎山塾で西洋砲術を学んだ。



鈴木重雄

（鈴木重久氏所蔵・安藤千代重氏提供）

1841～1915。鈴木家は重郎左衛門・重蔵を世襲名とした老臣。重雄は旧名を主税といい、幕末に御側御用人をつとめ、菊間藩でも施政・議正として最高幹部の地位にあった。

# 側近の実力者

近世初頭水野家が刈谷や吉田の城主だった頃から仕えてきた家臣や、続く信州松本藩主だった頃の旧臣など、家老・年寄をつとめた重臣たちは古くからの譜代の家臣が多かったが、藩主の側近く仕えその個人的な信用を得ることによって出世していった側近の中には、比較的新しい時期に水野家に仕えることになった新参者もいた。

幕末に活躍した金沢八郎正純（一八〇二〜六七）は、祖父が旗本時代の忠友に仕えて以来の家臣であり、決して譜代の老臣とはいえなかったが、黒沢家や水野家といった重臣の家に自分の息子を養子として送り込むなど、着々と藩内における地位を築き上げた実力者である。彼は安政六年（一八五九）御側御用人兼公用人に任命され、時の大老井伊直弼とも接触するなど、藩主忠寛の腹心として活動し、その後も城代（文久元年）・年寄（文久三年）を歴任した。「我が藩の御用人たりし金沢八郎氏は好物と評せられたる程に中々の敏腕家にして慶応の初年頃までは威権赫々、所謂飛ぶ鳥を落とす勢にて旧来の老臣等さへ殆ど顔色なき有様なりき」と同藩人からも見られていた。また、八郎の養嗣子六郎は御取次・御者頭、次男水野伊織重教は御番頭・御側御用人、三男黒沢弥兵衛著通は年寄をつとめるなど、その息子たちも幕末の藩内に勢力を擁した。

- (1) 「義嶽院殿御一代御留記」（金沢氏所蔵）より。
- (2) 「三浦徹手記続統取か記」『明治学院史資料集』第十一集（一九八四年 明治学院大学図書館）。
- (3) 「六郎正順履歴」（金沢氏所蔵）。
- (4) 水野重教については、宇野量介「仙台獄中の陸奥宗光」（一九八二年 宝文堂）、「水野伊織日記」（一九八三年 沼津市立駿河図書館）。

# 吏僚たち

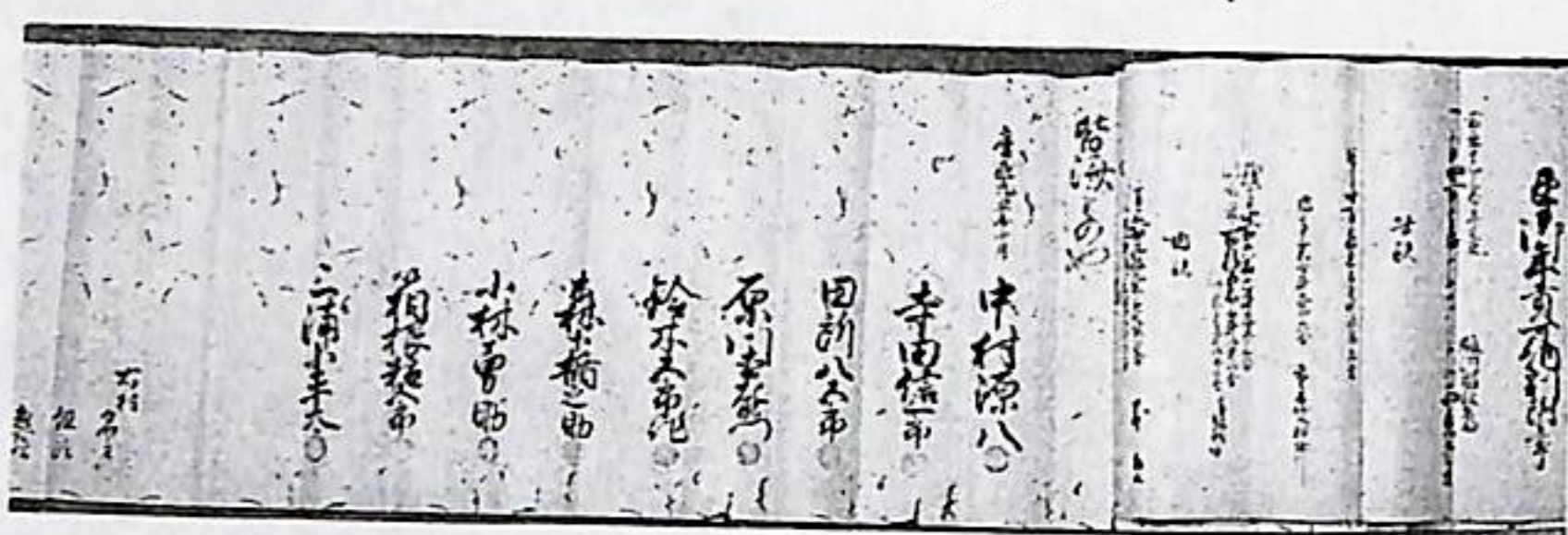
藩政の指導者や藩主の寵臣として華々しく活躍した者以外に、末端で藩を支えた多くの中下級家臣がいたことを忘れてはならない。多様な役職については巻末の「御家臣姓名録」を見ていただくことにして、ここでは中下級藩士特有の在地とのつながりについて注目しておきたい。

領民を支配し、貢租を取り立てるといった地域に密着した職務は、地方の事情に通じ、民情を把握することに長じた者でなければつとまらない。このような仕事に従事した郡方などの下級官吏の中には、譜代の上級家臣とは違い、その土地で新たに士分に取り立てられた庶民階級出身の者も少なくなかった。足軽などの軽輩にも地元平民出身者が多かったと思われる。

下に例として掲げた系図は、駿東郡志下村出身の原川家、同郡柳沢村出身の小野家、伊豆国田方郡中村出身の稲村家など、地元農民出身の沼津藩士のものである。自身の出自のみならず、姻戚関係により地元の有力量民・神官、あるいは葦山代官所の家来などと結ばれていることに、地域との関係の深さを見取ることができる。



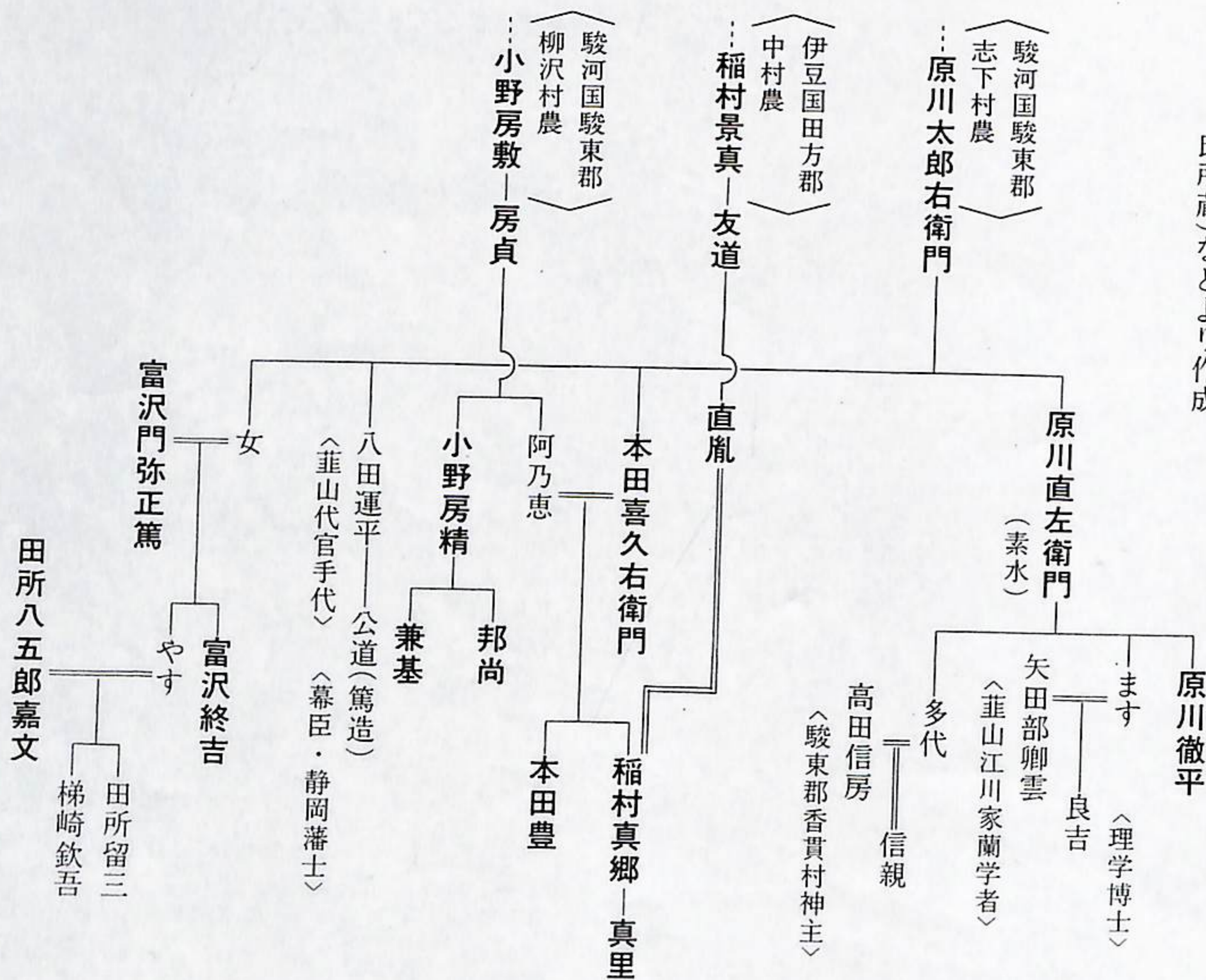
原川直左衛門(素水)  
(矢田部絢子氏提供)



沼津藩の地方役人の名前が並ぶ年貢割付状  
(西熊堂区有文書)

沼津藩士原川・稲村・小野家系図  
「原川氏諸霊位并系図稿」(本田雄幸氏所蔵)などより作成。

ゴチックは沼津藩士



水野伊織日記  
(水野襄二氏所蔵)

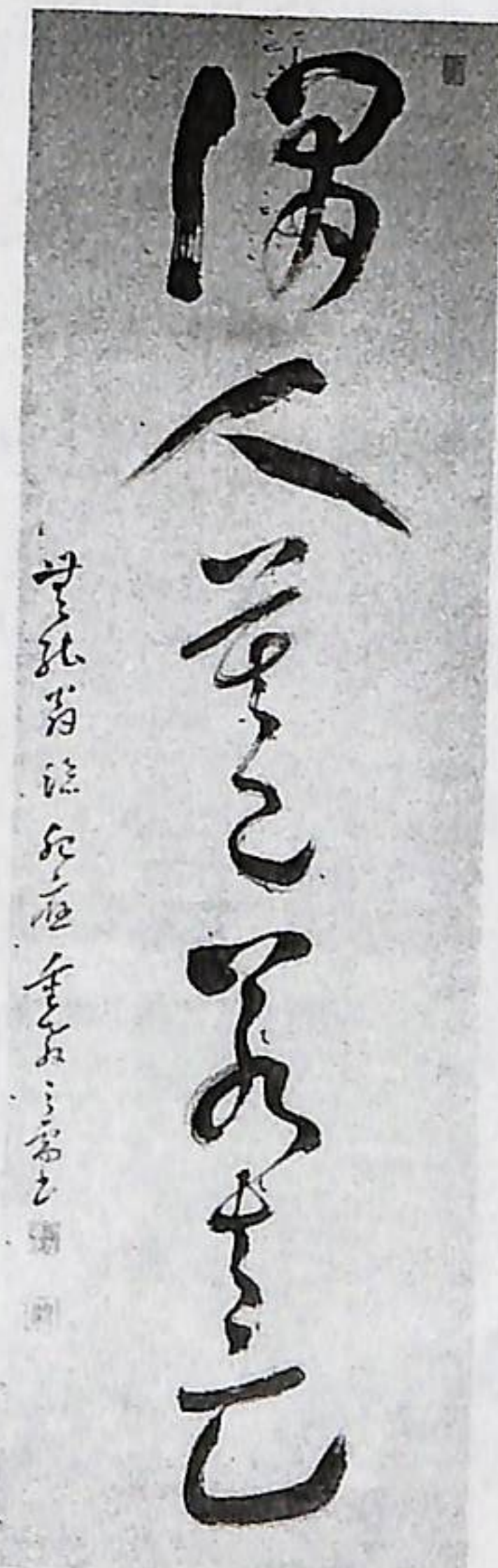
文久から慶応期にかけての幕末の沼津藩の動向を知ることができる貴重な史料となっている。水野伊織重教(1838~95)は、維新後は陸軍省・宮城県などに仕出し、官吏として後半世をおくった。仙台の宮城県監獄に在任中、国事犯として収容された陸奥宗光に対し、温情をもって接し、出獄後の陸奥も水野に恩人として報いた事実が知られる。



水野重教



金沢六郎(1836~1911)  
(金沢暁氏提供)



金沢八郎の書(水野襄二氏所蔵)  
次男水野伊織重教が金沢家より水野家へ養子に入るに際し、訓誡として書き与えたもの。



# 武術家

## 柔術

沼津藩の武道の中で最も有名なものは揚心流の柔術であろう。揚心流は、肥前国の人三浦揚心を開祖とし、豊後国の人阿部観柳を経て、江上武経が江戸に道場を開き、門弟千五百人余を擁し、広まったものである。江上の門人戸塚彦右衛門英澄は、戸塚派を称し、江戸に道場を開いた。その息子戸塚彦介英俊（一八三三〜一八六六）は、天保元年（一八三〇）沼津藩に召し抱えられ、父の跡を継ぎ、それまで江上流と称していたのを揚心流に復した。彦介は沼津藩で多くの門弟を育成したほか、江戸西久保（のち愛宕下）に道場を構え、幕府・諸大名の家臣や町人など無慮三千人を教授した。その隆盛ぶりは、江戸の柔術家といえは、御玉ヶ池の天神真揚流磯又右衛門か、西久保の戸塚彦介か、と称されたくらいであり、また、「ソノ演習ハ一ヶ年内正月元日ト八月十五日ノ両日ヲ休業スルノミ塾生ハ平素十五六人ニ過ギズト雖モ毎朝八時始メ夕五時終リヲ期トシ出場スル処ノ外来門人日々式百名ヲ降ラス其混雑云ベカラザルモ一場二三組ノ対試ヲ分ケテ研磨セシム府下道場ノ盛ナルハ他ニ其比ヲ得ズ」とまで言われている。万延元年（一八六〇）彦介は幕府講武所の柔術教授方（翌年頭取）に任命された。維新後菊間に移住し、廃藩後も千葉県の中学校や師範学校で柔道を教えた。

沼津藩における彦介の門弟で名前が知られるのは、柏崎又士郎・藍沢勝之・戸塚英美・山口雄次郎・毛利凱之助・柏崎甚平・小原三一郎・小熊本次郎・勝呂八平・山本伝八・小高亀太郎・都筑弘・島村峰芎・照島太郎・佐野周三郎・深沢為吉・天明力松・大木保太郎・杉山教道・斎藤寅作らである。以下、特に著名な人物を紹介してみよう。

戸塚英美（一八四一〜一九〇八） 通称彦九郎。彦介の長男。父に柔術を



戸塚彦介英俊（前列中央）と門弟たち  
（戸塚梅子氏提供）

学び、やはり沼津藩柔術師範をつとめ、若先生と呼ばれた。維新後は、司法省や千葉県に奉職、現在の千葉市に道場を開き、父彦介没後も揚心流の伝統を継承した。明治三十六年（一九〇三）大日本武徳会から最初の柔道範士の称号を受けた。

柏崎又士郎（一八三三〜一八九） 藩士柏崎甚平範綱の子。又四郎とも書く。十三歳で江戸へ出て戸塚彦介に学び、十七歳で目録、二十歳で免許、二十五歳で本免許皆伝を受け、藩の柔術師範となった。柔術のほか、男谷下総守信友に直心影流の剣術も学び、また男谷道場の榊原健吉らに柔術を教えた。万延元年（一八六〇）脱藩し、武者修業として西国に遊び、広島で武名を轟かした。慶応元年（一八六五）沼津藩に帰参し、戊辰戦争時は甲州に出陣。維新後菊間に移ったが、のち沼津にもどり駿東郡大岡村上石田に土着、医師を開業した。「鬼又士郎」の勇名を後世に伝える。なお、実弟大橋勘吾も水泳の名人として知られた武人だった。

藍沢勝之 旧名重次郎・翠。早房三右衛門の三男に生まれ、藍沢元三郎の養子となる。十六七歳より武道を学び、戸塚彦介に入門し修業に励む。慶応初年からは柏崎又士郎とともに柔術教授として藩士の指導にあたった。私設の道場五ヶ所を有し、沼津城下の志多町では相撲力士に柔術を教えたこともあったという。維新後は神奈川県や千葉県で警察官をつとめ、本務のかたわら巡査や看守に柔道を教えた。「練體五形法」という柔術の指導書も刊行した。明治四十四年（一九一一）七十二歳で没。

- (1) 揚心流については、綿谷雪・山田忠史編『武芸流派辞典』（一九六三年 人物往来社）などより。
- (2) 藍沢勝之『練體五形法』（一九〇三年）。
- (3) 静岡県駿東郡役所『静岡県駿東郡誌』（一九一六年）。
- (4) ①および『水野藩士転籍者名簿』（一九八四年 沼津市立駿河図書館）。



戸塚彦介英俊  
（戸塚梅子氏提供）



揚心流柔術師範戸塚彦介先生墓（千葉市 胤重寺）



藍沢勝之墓  
（沼津市 本光寺）

柏崎又士郎墓  
（沼津市 蓮光寺）

# 剣術

沼津藩士が学んだ剣術の流派には様々なものがあつた。以下  
剣術師範役として知られる人物を紹介してみよう。

**伊庭尺之助** 初代藩主忠友が江戸に道場を開いていた心形刀流の宗家伊庭  
軍兵衛に剣を学んだこともあり、その一族だった尺之助が沼津藩に召し抱  
えられたものと思われる。幕末に心形刀流を学んだ藩士としては、安孫子  
兵次・池田幸之丞・駒留判次・鈴木雄重といった名前が知られる。

**山下林右衛門房彬** 直心影流を学び、藩の師範役になった。その経歴につ  
いては墓誌（沼津市・蓮光寺）をそのまま掲げてみよう。

山下林右衛門房彬墓

君諱房彬字士炳故下総国小見川城主内田侯藩高安氏二男時年廿三其叔父山  
下友藏房将華仕本藩有年于茲晚年憂無嗣乞君託後君平素試直心影流劍法練  
磨刻苦遂究其蘊奧焉閩藩劍客從游得益者多云天保丁酉奉命移沼津兼劍法師  
同辛丑七月免其後以上田流筆道教導童蒙且嗜酒慰殘年或每有近隣非理相戾  
及朋友親戚閨門不和之事輒君自行循々講解能辨其事是迺老婆心之緒餘耳嘉  
永四辛亥年正月廿一日病歿得年七十有一追号瑞祥院春澤宗光居士

**小野順藏房貞**（一七七〇～一八三七） 内浦漁獵運上掛小野順藏房敷の子。  
江戸で知道軒戸ヶ崎熊太郎の門に入り、神道無念流を修め、帰藩後神道無  
念流剣術取立役・稽古頭取をつとめた。

**小野順藏房精**（一八一八～一八八六） 房貞の子。畿道軒戸ヶ崎熊太郎に入門。  
弘化三年（一八四六）免許伝授、翌年神道無念流剣術取立役、安政元年（  
一八五四）剣術師範役に任命される。長州征伐にも出陣した。

**古地茂穂** 旧名保作。藩士山下林右衛門や竹内申吾に直心影流を学び、慶  
応二年（一八六六）に教授並となった。維新後は菊間に土着し、醸造業を  
営んだ。明治二十三年（一八九〇）六十八歳で没。

**広瀬坦**（一八四六～一九一〇） 初名鉞太郎。江戸で鏡心明智流の桃井春

藏直正に学び、文久三年目録、慶応元年印可を受けた。なお、江戸の三大  
道場のひとつといわれ、北辰一刀流の千葉周作などと並び称された鏡心明  
智流第四代桃井春藏直正（一八二五～八五）は、沼津藩士田中家の子で、  
桃井家の養嗣子となった人であった。

このほか、沼津藩の剣術師南には、秋山喜久三・前田信之丞（以上神道  
無念流）・柳沢一馬（以上流派不明）といった名前が知られる。

# 槍術

槍術家としては、深美勘四郎、庵地彦助保基（種田流・嘉永  
七年六十八歳没）、谷城之助、井出源次郎らが知られる。

# 弓術

弓術家・弓術師範としては、豊田勇夫常之、富沢門弥正篤、  
原田糺種匡、原田次郎大夫栗生、鈴木権之丞雄重といった人々  
がいた。流派は、日置流伴道雪派、大蔵派、雪荷派などだった。

# 馬術

馬術では、大坪本流の齋藤主税の門人・堀江源五右衛門、同  
源五左衛門が有名である。沼津城下添地には馬場が設けられ、  
藩士たちに乗馬が教えられた。

# 砲術

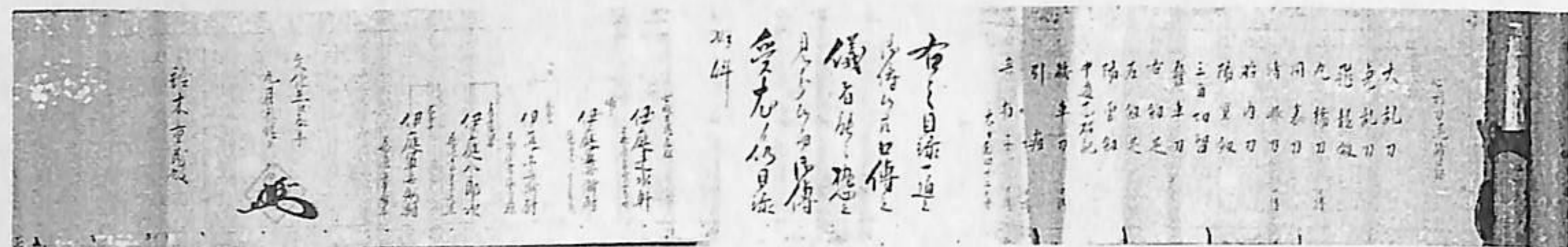
嘉永年間に葦山の江川坦庵に就いて高島流を学んだ藩士によ  
って西洋式砲術が伝えられるまでは、下級藩士を中心に、荻野  
流・武衛流といった古式の砲術が行われていた。荻野流では鶴沢鐵馬敬慎  
（御足軽鉄砲取立方）、武衛流では江本岩右衛門（御番方大筒役）・江本  
岩藏といった人々がいる。その他、鉄砲師範（流派不明）として大野三郎  
右衛門・大野久太夫という名前も知られる。

① 小野基樹編「祖父のおもかげ」（一九三四年）、「小野家系図」（小野秀樹氏所蔵）  
より。

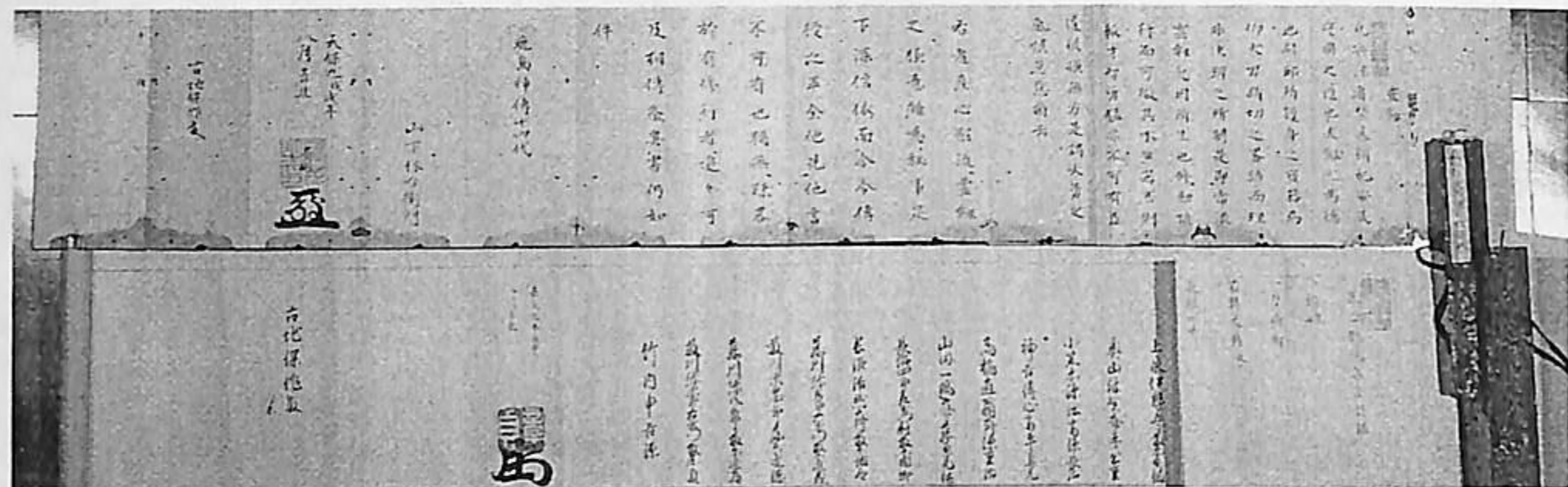
② 「家系」（庵地淑氏所蔵）より。

③ 綿谷雪「増補武芸小伝」（一九七一年 歴史図書社）。

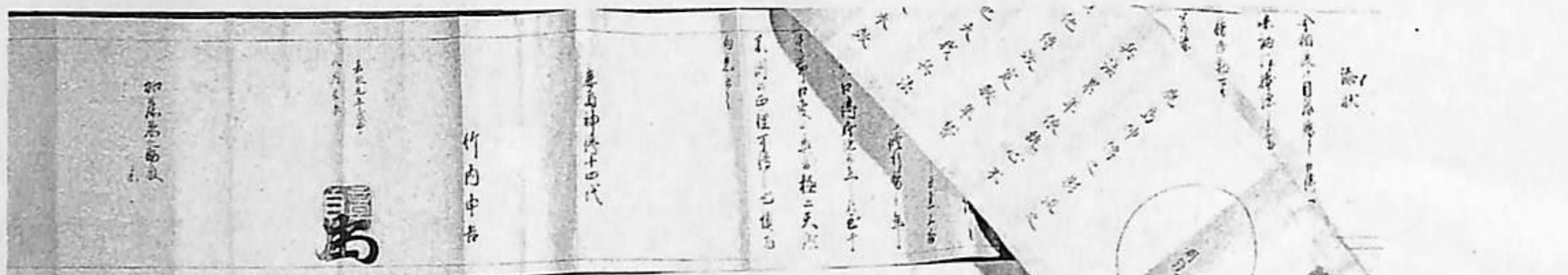
④ 「駿藩仕録」（一九八九年 沼津市立駿河図書館）。



心形刀流目録（鈴木重久氏所蔵）



直心影流目録・靈剣  
（古地昭夫氏所蔵）



直心影流目録添状  
（加藤英雄氏所蔵）



小野順藏房精  
（小野秀樹氏提供）



鏡心明智流目録・印可（広瀬二郎氏所蔵）



日置流弓術免許状  
（古地昭夫氏所蔵）



大坪本流馬術免許状（鈴木重久氏所蔵）

# 儒学者

二代藩主忠成のとき沼津城二の丸(のち添地)に藩校矜式館が設立され藩士子弟に対する学問が奨励された。また沼津のみならず、江戸の藩邸や三河国大浜陣屋・越後国五泉陣屋にも学問所が設けられた。いずれもその中心は勿論儒学であり、教授の多くは漢学者であり、国学や洋学は幕末に至るまで教えられなかった。儒官として名前が知られている人物には、島津東陽・同恂堂・同元圭・駒留陋齋・今井篤平・程田玄規・同玄庵・岩城魁・渡辺孝・草間学・五十川中・二本幹・高柳邦・本田豊・村瀬登・富沢終吉・小野邦尚・戸塚武允・今井虎介・程田文平・川澄下枝らがある。うち数名を紹介してみよう(島津・駒留は藩医のところ後述)。

岩城魁(一八三二—一九〇五) 岩城岩輔の子。初名魁太郎、石丈・梅閣などと号す。山中静逸・塩谷右陰に学び、藩校で教鞭をとる。維新後は伊豆の修善寺に住し、小学校の校長をつとめ、また静岡師範学校や静岡中学校でも教えた。『読史偶詠』『沼津雑誌』『元明史略字解』『小学用本早字引』『兵要日本地理小誌訓話引』『修善寺新誌』などの著書がある。

高柳邦 藩校教授や侍講を兼ね、また水野家の家史編纂事業の中心人物として、現在早稲田大学に所蔵されている多くの水野家史料を書き残した。菊間藩では中助教をつとめ、廃藩後は菊間小学校の訓導となった。明治二十二年(一八八九)東京で没。

川澄下枝(一八四二—一八八二) 初名源三郎。柿島家に生まれ川澄雅光の養子となる。漢籍に長じ、国学も修めたという。慶応三年時点で句読師・学校御徒士目付。維新後は新川県・鳥取県・東京府などに奉職。渡辺孝 旧名乙蔵。沼津城下町方町で私塾を開いていた。明治七年千葉県権参事、八年東京府大属、十年同一等属、十五年麻布・赤坂区長を歴任し、

明治三十三年(一九〇〇)没。  
小野邦尚 旧名邦衛。小野房精の子。明治後は海軍兵学寮で皇漢学教授。五十川中 私塾善学塾を開く。主に上士の子弟が通学したという。二本幹 旧名健蔵。菊間藩では文武館寮長・学校掛・軍事掛・議衆・大得業生・舎長などをつとめ、明治三十一年(一八九八)没。

富沢終吉 旧名兵馬。菊間藩では議衆・軍事掛・学校掛・庶務掛・近侍。なお、藩士とは別に、藩主から招聘され一時沼津藩で教鞭をとった学者としては、天保年間に五代藩主忠良から招かれた東条一堂、文久年間に七代藩主忠誠から招かれた阿部千万多(誠蔵 一八二一—一八八八)がいる。特に忠誠は、藩校を明親館と改名し、大幅な学制改革を実施するため、出羽国出身の浪人に過ぎなかった阿部を抜擢したのである。阿部は単なる儒学者というよりも海防論者・経世家であり、志士だった。しかし、忠誠の信任を得たものの藩内の反対派に恨まれ、江戸芝三田の路上で庵地福太郎ら四名の刺客に襲われ傷を負い、改革中途にして藩を辞去せざるを得なかった(のち戊辰戦争において郷里庄内で戦死)。阿部暗殺未遂事件に関わった藩士はのちに処分された。

- (1) 前掲『駿藩仕録』、巻末「御家臣姓名録」、文部省編『日本教育史資料』(一九六九年)などより。
- (2) 梅閣岩城先生墓誌銘(修善寺町所在、『修善寺村誌』所収)より。
- (3) 金井圓『藩制成立期の研究』(一九七五年 吉川弘文館)、高柳先生之碑(市原市所在、『市原市史』下巻所収)より。
- (4) 柿島君之墓碑(東京・真珠院所在)より。
- (5) 大植四郎『明治過去帳』(一九八八年 東京美術)。
- (6) 鶴田忠吉『東条一堂伝』(一九五三年)。
- (7) 高橋直勝『阿部千万多』(一九一一年)。



7代藩主水野忠誠  
(鈴木弥春代氏提供)



高柳 邦  
(谷井信雄氏提供)

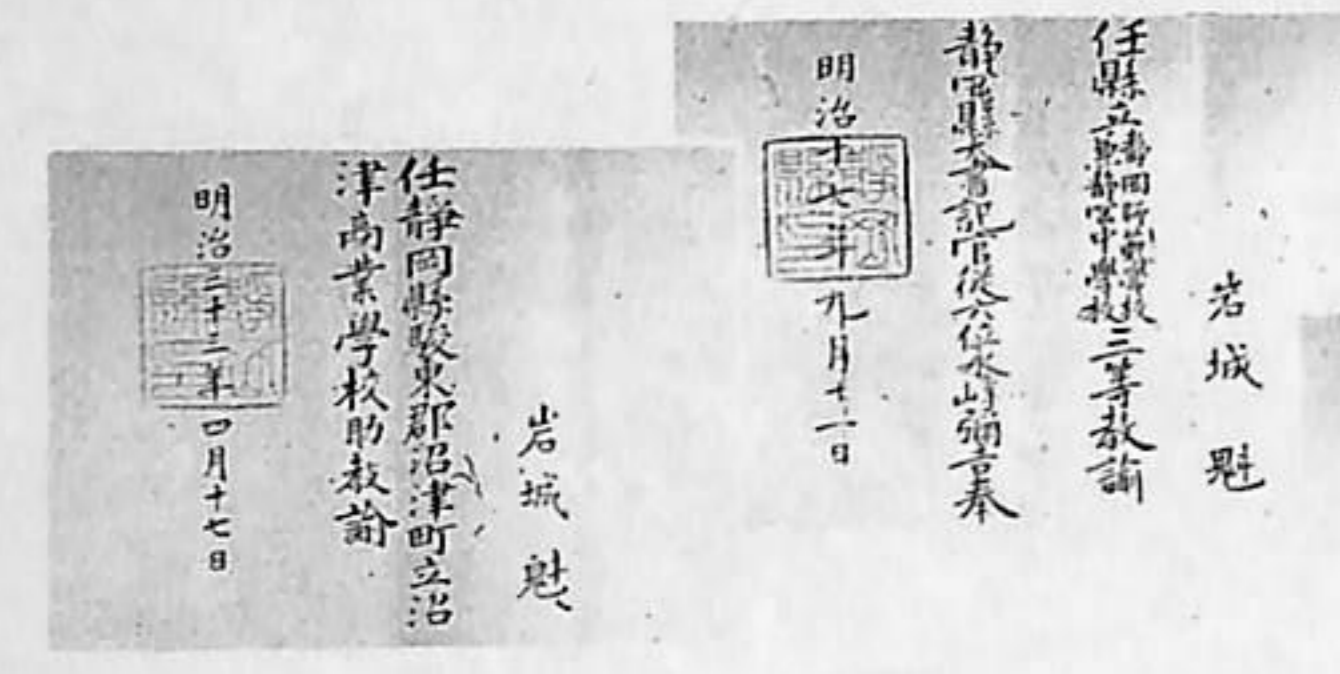
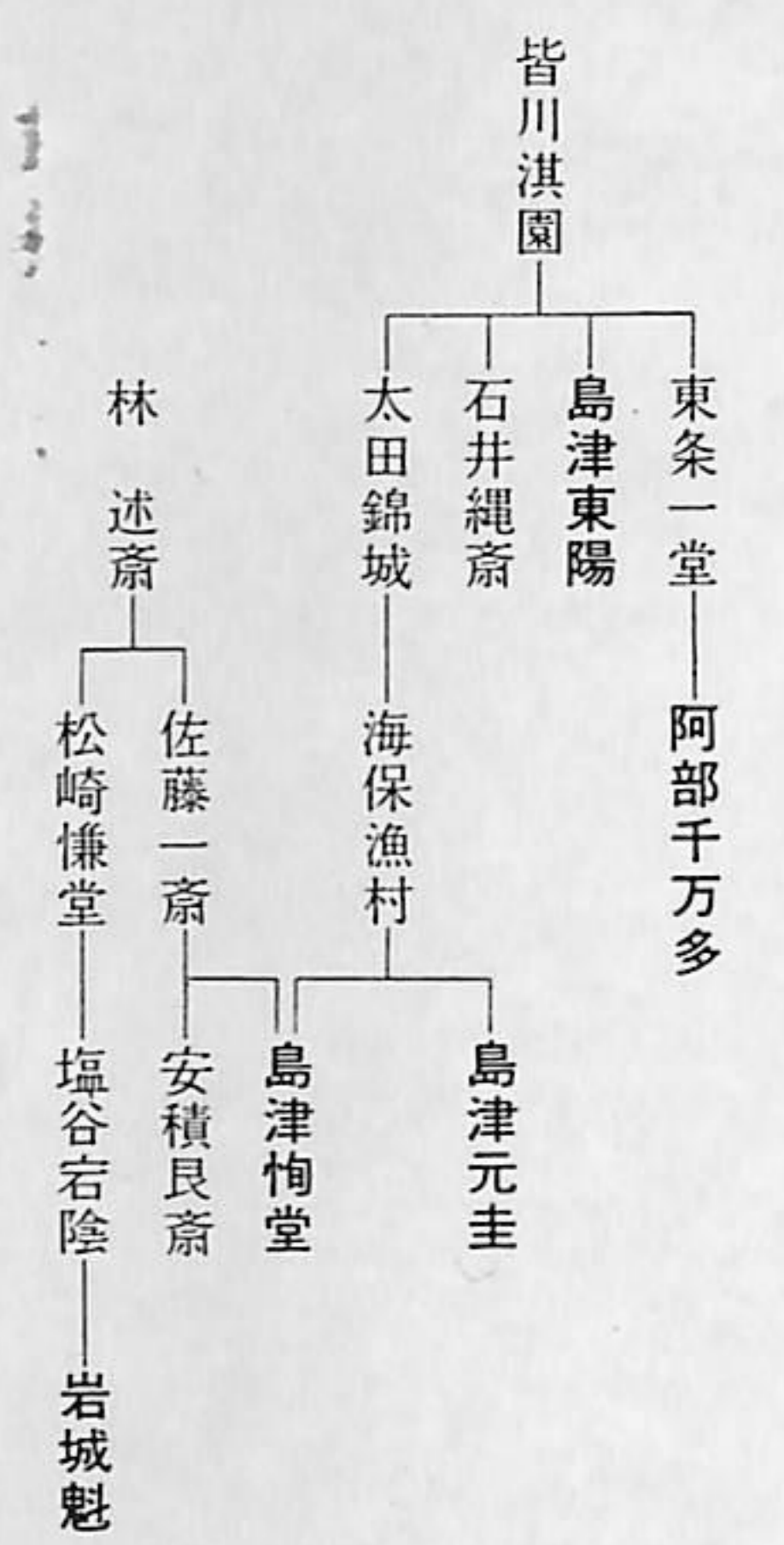


二木 幹  
(二木和子氏提供)



岩城 魁(右)  
(宇野政夫氏提供)

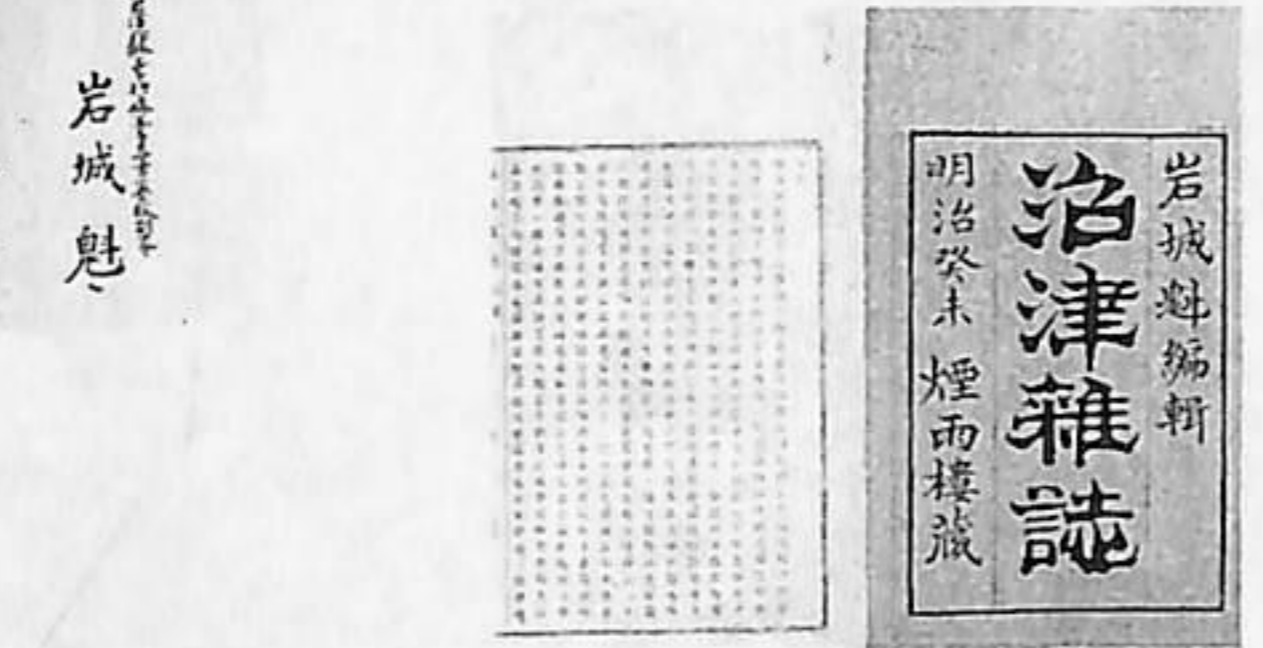
## 沼津藩儒官の学統 ゴチックは沼津藩関係者



岩城 魁の辞令



岩城 魁(後列左)  
(宇野政夫氏提供)



岩城魁の著書

# 洋学者

幕末になると伝統的な漢学のみならず蘭学や英学・仏学といった洋学を学ぶ藩士たちも出現した。蘭学の導入は医学からであるが、蘭方医については次節で述べることにし、ここではそれ以外の人々を紹介する。

沼津藩は伊豆に領地を持っていた関係上、海防に意を注ぎ、東海岸の川奈・富戸・稲取・白浜に砲台を築いた。当初は荻野流や武衛流といった旧式の砲術が行われていたが、弘化四年（一八四七）より三浦千尋・服部純・宮山千之助・稲垣源次兵衛の四名が葦山代官江川坦庵の葦山塾に入門し、高島流砲術を学び、西洋式砲術が採用されるに至った。三浦・服部・宮山は免許皆伝を受け、以後彼らを通じて沼津藩に高島流が広まった。そして文久から慶応年間に入ると、弓組が廃止され銃隊が編制されるなど、藩の軍制は全面的に洋式化されていた。

三浦千尋（一八二四〜九四） 通称佐太郎・小平太、別名保定。父小平太（木端）の子。嘉永元年（一八四八）より葦山塾の塾頭をつとめ、翌年皆伝を受く。ある時、師江川坦庵が塾生との座談で、一朝有事の際誰が将帥たるべきかを質問したことがあったが、皆が様々な人名を挙げる中、坦庵は三浦こそ度量といい知識といい最適の人物であると評したというエピソードもある。慶応三年時点では、御城代・御政事掛の重職にあり、維新後菊間藩では大参事となり、藩の最高指導者となった。

服部純 別名弁内・純人・峰次郎、諱方從、号実庵。御番頭などをつとめた純平方信の子。弘化四年より嘉永五年に退塾するまで親しく江川坦庵に師事した。ロシア軍艦ディアナ号にあったイギリス製航海図をもとに、安政五年（一八五八）に沼津で刊行された『輿地航海図』（杉田玄端閣・武田簡吾訳）の序文を小林信近とともに担当した。彼自身も武田の翻訳作業

を手伝った可能性もある。彼は藩内の改革派だったらしく、阿部千万多の招聘を建言したり、前藩主忠寛に直諫して妾を追放させるなどの行動が知られる。菊間藩では少参事をつとめ、三河国大浜出張所で新政を実施したが、そのことは後述する。明治十一年（一八七八）四十五歳で没。

次に、英学と仏学を学んだ者について。

深沢要橋 藩士清水千翁の次男に生まれ、藩医深沢雄甫文温の養子となる。慶応三年（一八六七）三月より幕府の開成所に学び、維新後も引き続き大南校に学び、少得業生から大得業生を経て、明治四年（一八七一）七月文部中助教に任ぜられた（二十四歳）。同年十一月からは東京の私立学校共立学校（のちの開成中学）の英語教師として教鞭をとった。

駒留良蔵（一八四八〜九〇） 藩医駒留陋齋正隆の三子。村上英俊の達理堂に入りフランス語を学ぶ。慶応二年（一八六六）フランスに留学、明治四年政府の留学生に任命され、法律を学び、八年に帰国。警視庁に出仕し、長崎控訴院検事などをつとめた。

佐々木定静 旧名弁之助。慶応三年二月慶応義塾に入る。明治元年沼津藩歩兵隊長となり、維新後は菊間藩の軍事部門を主管した。のち兵部省・海軍省に出仕し、明治三十二年（一八九九）没。

（1）石井岩夫編『葦山塾日記』（一九六九年 葦山町役場）、石井岩夫「沼津藩の海防と砲術訓練」『沼津史談』十五号（一九七四年）、鈴木保「沼津水野藩と高島流砲術について」『伊豆の郷土研究』九（一九八四年）。

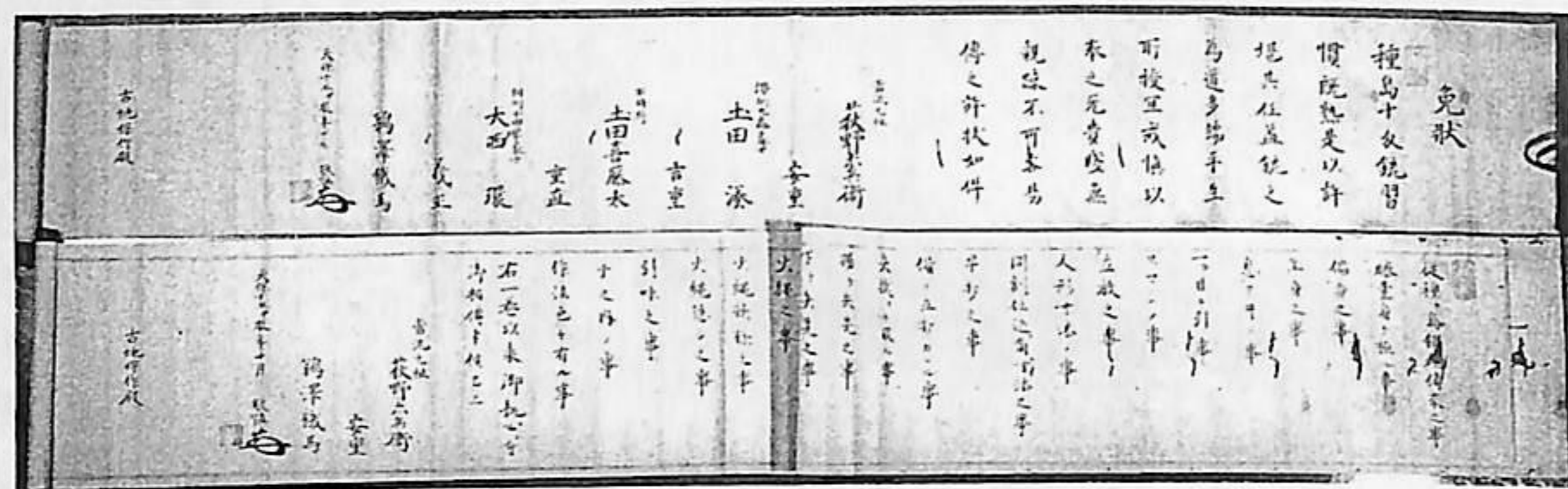
（2）三浦徹宛柳下知之書簡控（柳下柳平氏所蔵）。

（3）奥居彦松「老母を園んで」（一九七五年 沼津市立駿河図書館）。

（4）『開学明細書』第四卷（一九六三年 東京都）。

（5）大植四郎『明治過去帳』（一九八八年 東京美術）。

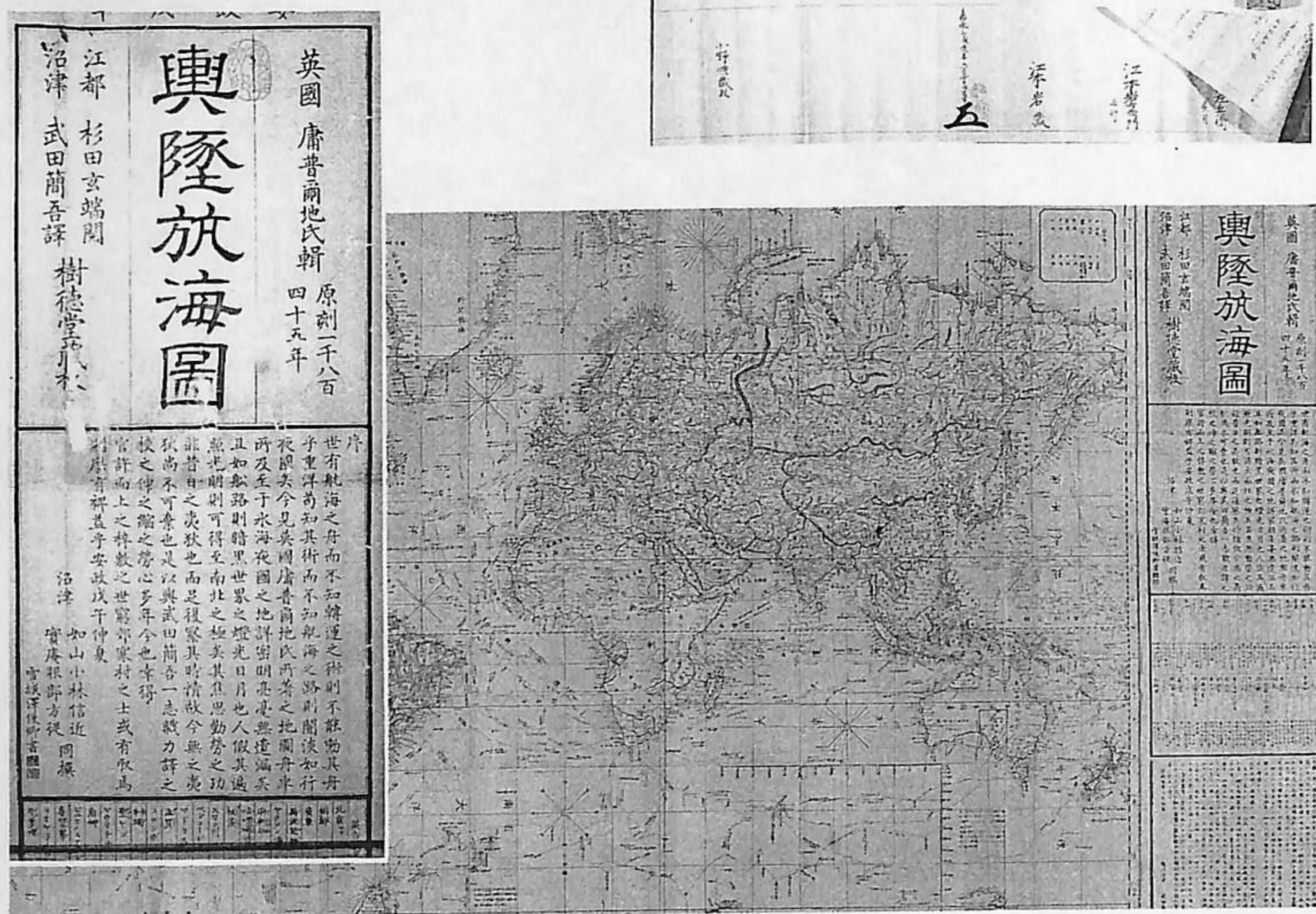
（6）福沢研究センター編『慶応義塾入社帳』第一卷（一九八六年）。



高島流砲術が伝わる前に採用されていた荻野流砲術（右）と武衛流砲術（右下）の免許状。（古地昭夫氏・小野秀樹氏所蔵）



▼輿地航海図とタイトル・序文の部分（鈴木達雄氏寄託）  
翻訳者武田簡吾は沼津藩士ではないらしいが、沼津在住の蘭方医だった。



三浦千尋胸像（三浦一郎氏所蔵）



服部 純（松永礼三氏提供）



深沢要橋（深沢溥氏提供）



佐々木定静（佐々木育子氏提供）

# 藩医の人びと

## 漢方医

幕末に蘭方医が優勢になるまでは漢方医が藩の医師の上部を占めていた。左のような人々である。

島津東陽（一七七三―一八四七） 別に一斎・逸斎・維峻と称す。文政十三年（一八三〇）沼津藩に仕え、医師と儒官を兼ねた。父退翁はもと駿河国田中藩の藩医だった。医学を吉益南涯、儒学を皆川淇園に学んだ。島津恂堂 別に得山・維範と称す。東陽の子。幕府の医官多紀元堅に医学、佐藤一斎・海保漁村に儒学を学ぶ。維新後は伊豆の修善寺で郷校を開き、明治五年（一八七二）六十九歳で没。

島津元圭 別に元敬・雪湖・維章と称す。恂堂の養嗣子。最初多紀元堅に学んだが、のち蘭方に転じ三宅良斎に就いた。菊間藩では少助教に任ぜられた。廃藩後沼津にもどり大正元年（一九一二）八十三歳で没。

中村元敬 通称玄三、信齋とも号す。祖父元東は松本藩時代に水野家に仕えていた。兄二人もそれぞれ高遠藩・松本藩の侍医になっている。若くして紀州の華岡青洲に就き医学を学び、文政十三年（一八三〇）侍医となった。編著書に『医務』・『種痘辨』（嘉永五年）・『徳本翁書牘』（嘉永六年）などがある。『種痘辨』では蘭方医による種痘を批判している。安政六年（一八五九）六十四歳で没。安積良斎なども交遊があった。

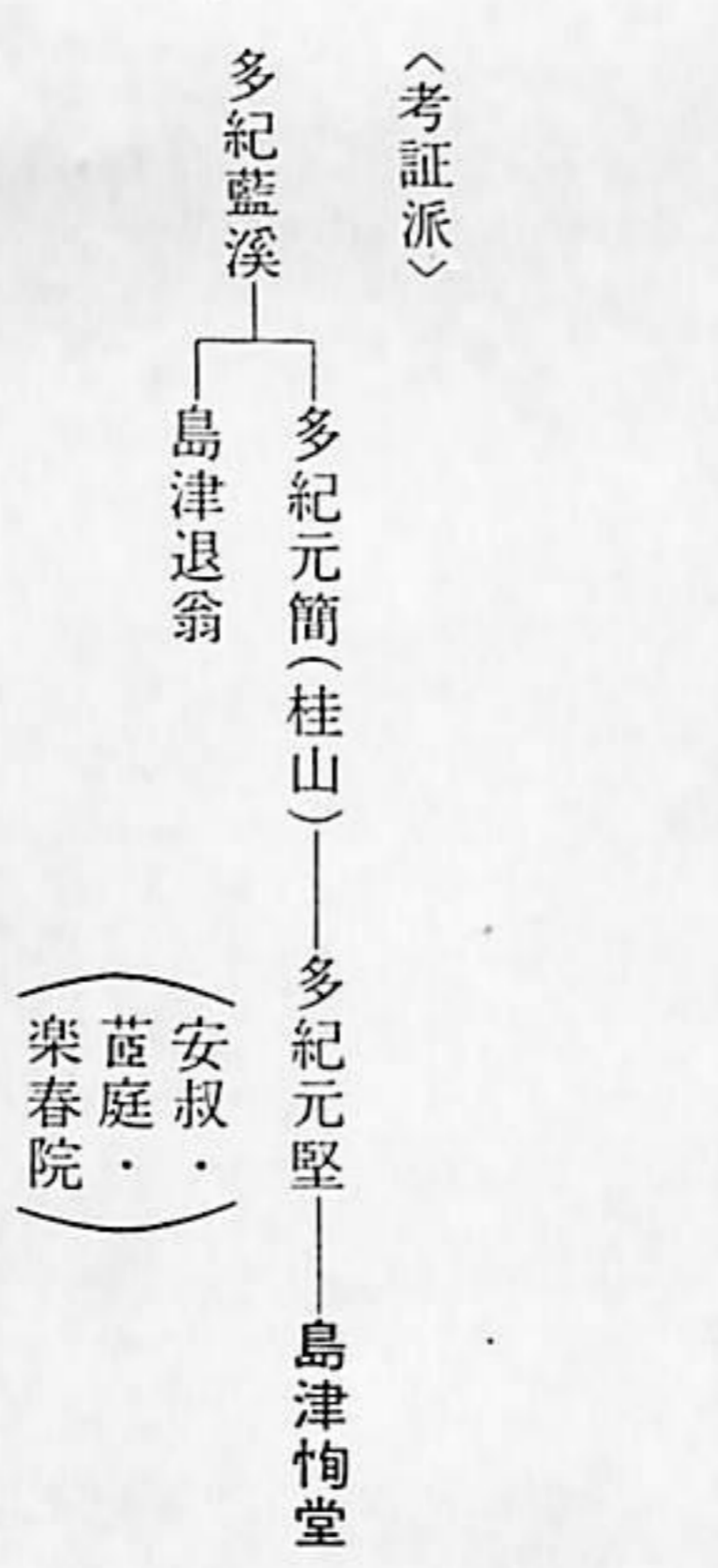
蘭方医 種痘の普及などを通じて蘭方医が台頭してくるのは嘉永期くらいからであろうか。以下が代表的な人々。

柳下惠齋 駿東郡上香貫村の豪農柳下家の一族。墓誌をそのまま紹介する。大導師寛猛日心居士 翁諱知幹姓菅原号惠齋一号寛猛柳下氏以医仕本藩余於翁為養祖父性寛猛彬彬然美篤行長者也刀圭之余好詠倭歌郷人亦多称之以安政丁巳八月朔日歿寿七十有六余預叙其行事勒石以建焉 安政六年歲次己未

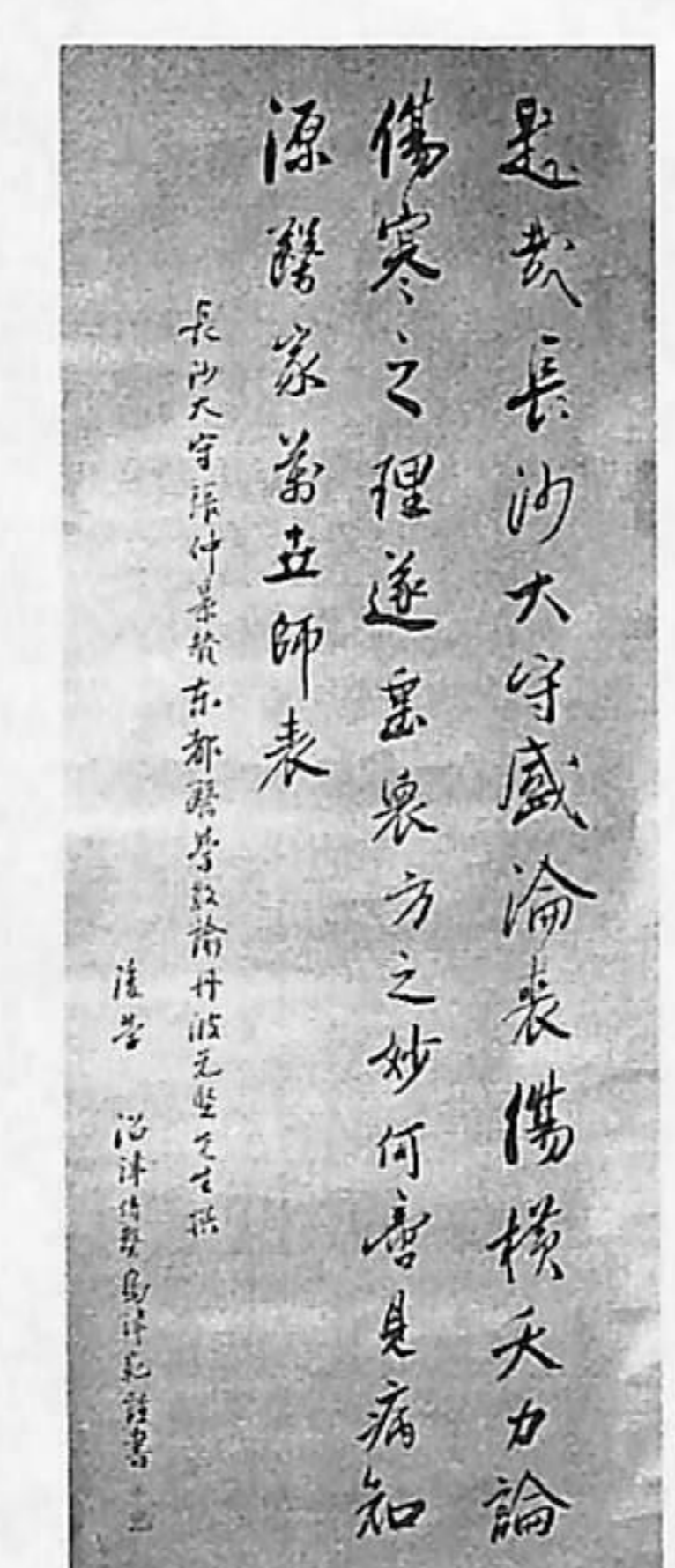
未秋七月 柳下養齋知之（沼津市住吉町所在）柳下立達 惠齋の養子。弘化二年（一八四五）に緒方洪庵の適塾と広瀬元恭の時習堂に入門、ほかに坪井信道の日習堂でも学んだ。墓誌は左の通り。常思院立達日惠居士 立達諱知泰字君山号臨谷又和庵三島世医杉原玄庵知純三子也其先日杉原伯耆守長房我寛猛翁無子養以如子其為人廉正沈毅学富才秀以刀圭仕本藩家勢益振蓋當時巨擘也安政四歲丁巳九月九日以疾死享年四十有二諡日常思 嗣子養齋知之誌（同前）柳下知之（一八二六―一九〇〇） 旧名養齋・容齋。惠齋の門人だったが訖われて立達の養嗣子となる。維新後は大学東校・文部省に出仕し、のち陸軍に転じ二等軍医となり大阪鎮台に勤務した。深沢雄甫文温（一八二二―一九二二） 雄甫兼文の子。塙主齡・杉田立卿・安部魯庵・緒方洪庵に従学。文久三年奥詰御医師となり長州征伐出陣中の藩主忠誠の治療に尽くす。菊間藩では大助教・二等医となり、廃藩後は三島で開業、医務取締などとして足柄県・静岡県の地域医療に貢献した。駒留謙斎（一八四六―一九〇二） 祖父正見は重臣水野助左衛門其敬の弟、父陋齋正隆は天保十二年に千本浜に建てられた六代松の碑の撰文をしたことと知られる医官兼儒官、弟良蔵は仏学者。維新後は軍医になった。このほか藩医として、程田章伯、同玄悦、同玄隆、遠山瑞碩、松山快応、同養民、川口玄章、祐乗坊元東、同汶清、同庸軒、喜多島宗伯、同周悦、青地主税、杉山栄軒、照島太郎、河端欽斎、同元洪らがいた。

- (1) 沼津市医師会史編集委員会『沼津市医師会史』（一九六四年）。
- (2) 石上東葉『沼津雑記』、『本道楽』六十九（一九三二年）、信齋中郎翁墓誌銘（東京、真珠院所在）などより。
- (3) 柳下孝子『こなからの記』（一九八六年）などより。
- (4) 沼津医師会史編集委員会『沼津医師会史』（一九七八年）などより。

## ゴチックは沼津藩士



中村元敬墓  
（東京 真珠院）

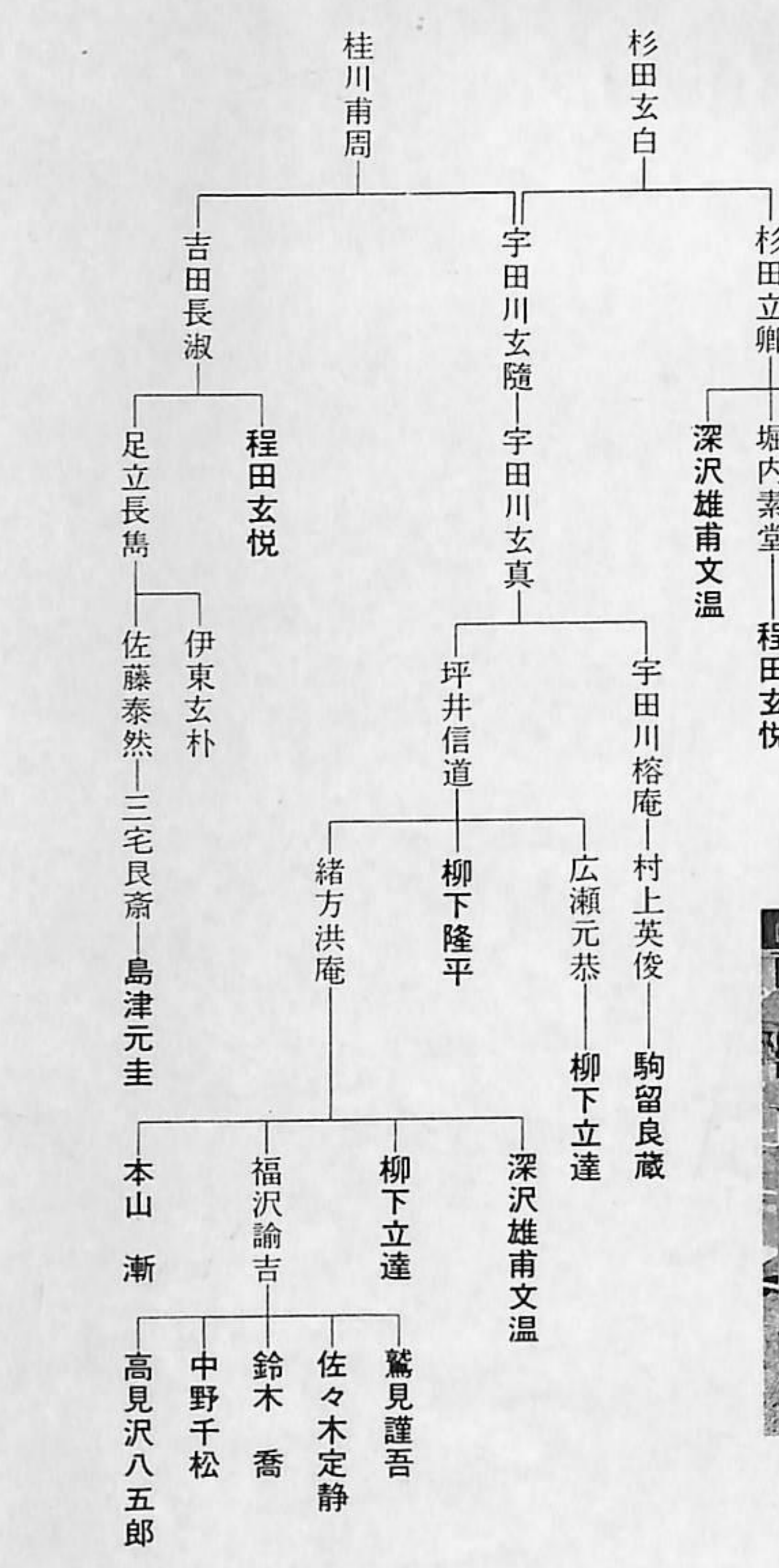


島津恂堂書  
（島津祥次氏所蔵）

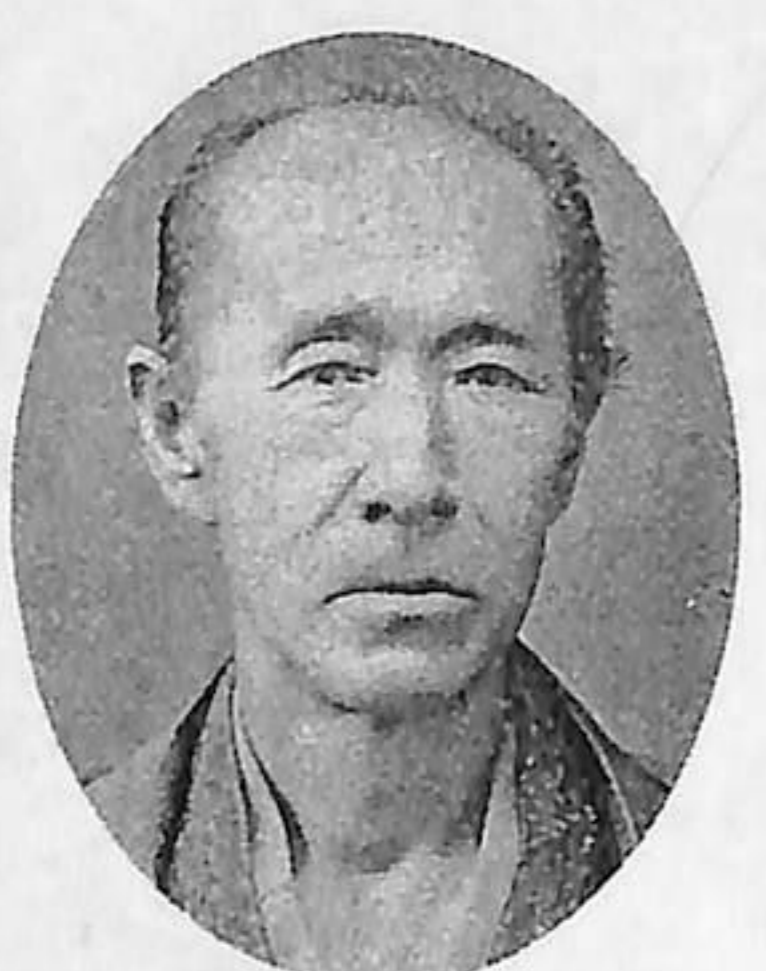


中村元敬著  
『医務』(上)と  
『種痘辨』(右)  
（京都大学医学図書館所蔵）

## 沼津藩医の系統（含洋学者）



柳下知之  
（柳下貞之氏提供）



深沢雄甫文温  
（深沢溥氏提供）

## 文人たち

### 俳諧

沼津藩士の中には趣味として俳諧を楽しむ風流人が多かったようである。以下その代表的な人物を紹介してみよう。

**山崎正處**（一八一二—一八一） 柳蔵の子。通称源吾・柳蔵、継述ともいった。号を飛銭事仏、四消老と称した。俳号を壺中庵夜雨麿といい、安政四年（一八五七）宗匠となり寥鷲と改名した。江戸で活躍し、のち沼津に移る。谷文晁の門下ともいわれ、画才もあり、安政の大地震での沼津の被害の様子やロシア軍艦ディアナ号の乗組員が沼津城下を通過する時のスケッチを残している。維新後は伊豆国田方郡桑原村に土着し、土地の人々に俳句を教えた。息子の山崎兼三郎と小野帰一はギリシア正教界で活躍。

**田辺四友** 藩士佐々木守恒（庄吉）の子に生まれ、田辺忠八の養子となる。通称孝三郎・直之丞、諱は行信。天保初年は公用方御物書などをつとめ、幕末には藩主分家水野春四郎の付役をつとめていた。俳句の宗匠としての号を瑤草庵四友といい、江戸で名を馳せた。息子の田辺貞吉・手島精一兄弟は明治の財界・官界で活躍した。明治二十一年（一八八八）七十三歳没。

このほか、吉村甚五右衛門（竹堂・南華房東鳩）、星野次郎右衛門（一諾浮龍・天均庵閑鷗）、青木半右衛門（犁牛齋鳥久）、尺齋羊起（成田氏・南帰亭寿考）、嵯塚谷時雨（清水氏）、跨鶴齋雲臥（石橋氏・不積）、交帰庵蒼海（新村氏・稲井居）、二見善太夫（何有庵左角）、箱根粒五郎保教（映洲舎蚊思）、広瀬権左衛門（一八〇六—九二、花廻本塵外）、互明、只弄、波文、舎柳、一笑、一萍、曙江、文魚、児道、如帯、孝平といった俳人たちが藩士の中にいた。

### 和歌

歌人としては、伊豆の国学者竹村茂雄の門人だった加藤円蔵、英清（文化十四年入門、郡方手代）、伊勢の国学者鬼島広蔭の

門人だった加藤善右衛門（嘉永二年八十五歳没）、伊豆の女流歌人菊池袖子と交流した柳下惠齋（前述）などが知られる。

### 狂歌

狂歌を嗜んだ人物としては左の二名がわかっている。下級藩士である。以下間宮喜十郎編『沼津史料』第三より引用。

**矢田正純** 俗称圓司藩士而住沼津為人博雅工狂歌自著松廻枝折名勝旧跡一々附吟歌未脱稿以安政初病歿其遊春日丘詞日笹蟹毛糸をはる日の岡の松に舞か、りしハ虫の羽衣又鎧掛松詞日流れ矢のあたりしと聞し鎧松すこし外れて畑のくろ波

**紀ノ安丸** 姓湯山名某通称儀四郎入浅草緑樹園社善狂歌最知名旧為小田原藩臣天保中辞藩而客居于沼津後仕水野侯慶応初藩舎歿年七十一為人寡欲善甘貧今録遺詠二首賞月日一ツ紋染たるような月影ハ今宵はれ着の秋のそら色越箱根日二子山その手習の文庫山秋のいろ葉もいつか散りぬる

### 絵画

画人としては、老臣水野助左衛門其敬の弟で、谷文晁の門人だった鈴木謙齋（六郎・金平、天保五年藩籍離脱）がいる。

**鈴木謙齋** 俗称金平善絵画又好俳徊号茶佛藩老水野助左衛門弟也明治初歿于古奈西琳寺齡七十六少壯在江戸遊于文晁門云為人瀟灑不拘小節嗜酒嘗以酒酣削士籍爾來倚兄風流自處（『沼津史料』第三より）

### 茶道

初代藩主忠友とその家老土方縫殿助が江戸千家流の祖川上不白の門人だった関係から、不白の門人川上宗訓（不染）、同不白（梅翁・物々齋）といった茶人が藩に召し抱えられ、代々仕えた。

- (1) 『地震之記』（一九七五年 沼津市立駿河図書館）。
- (2) 函南町誌編集委員会『函南町誌』下巻（一九八五年）。
- (3) 石上東葉『沼津雑記其三』、『本道楽』七十八（一九三二年）、『俳諧人名録』（天保七・十年）、『万葉俳人名録』（天保七年）などより。
- (4) 武家史談会編『武家茶道の系譜』（一九八三年 ぺりかん社）ほか。

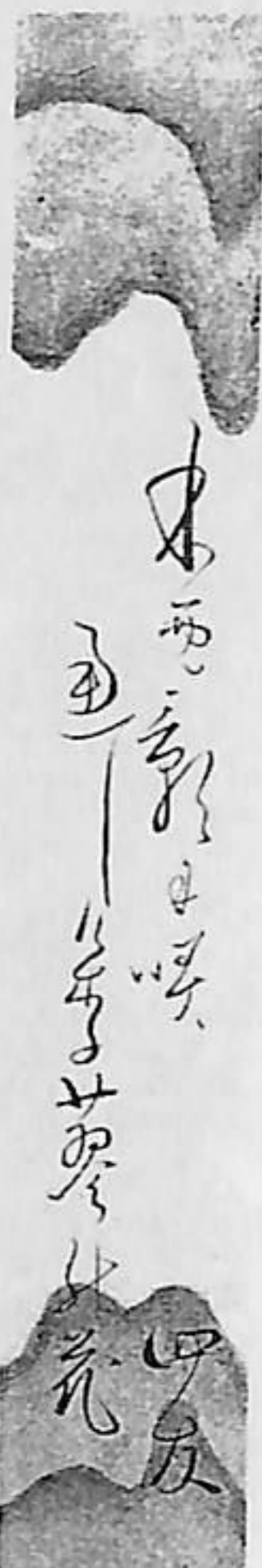


田辺四友  
(田辺俊一氏提供)  
慶応4年54歳のとき京都で写す。



田辺四友句碑拓本  
(田辺一男氏所蔵)  
明治3年東京に建てられ、現在は神戸市の田辺家に移されている。

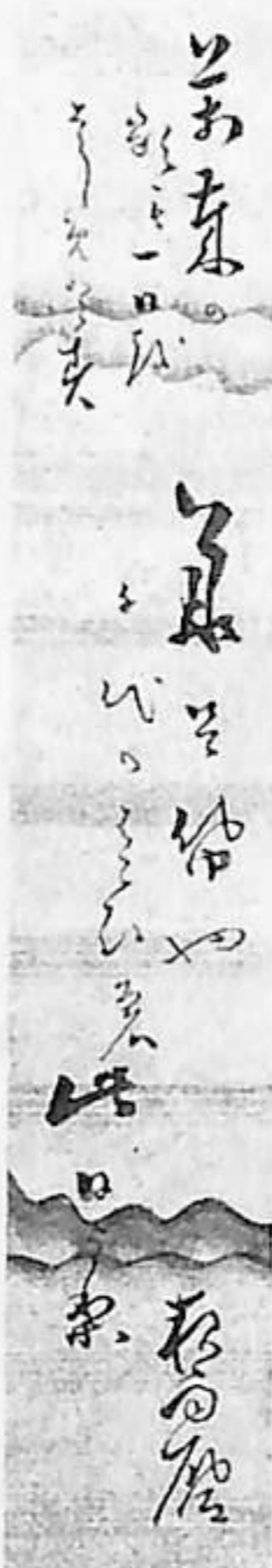
更ゆくや野にも山にも月の影



田辺四友短冊 (田辺俊一氏所蔵)

木の影に咲通しケリ夢の花 四友

山崎正處短冊 (田辺俊一氏所蔵)



万歳の齢も一日を 華足袋や千代のはこひも此日より  
はしめとす

夜雨麿



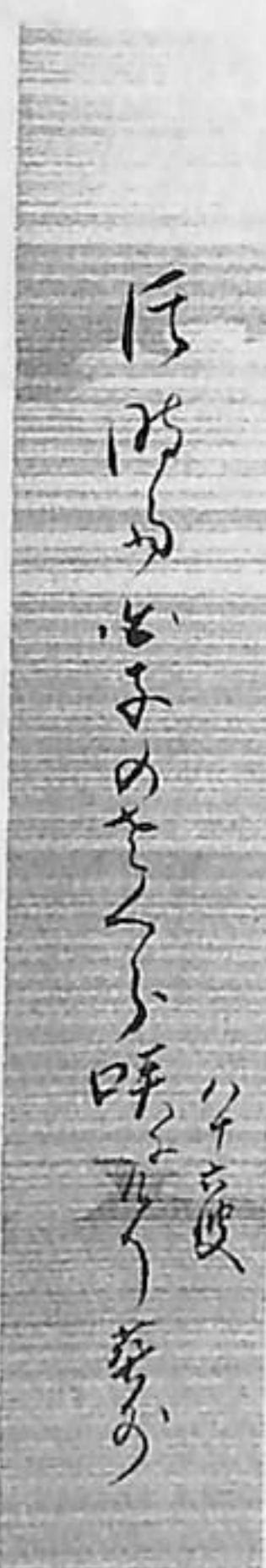
瑤草庵宗匠月並句合刷物  
(尾崎明氏所蔵)



広瀬塵外  
(広瀬二郎氏提供)



壺中庵宗匠判月並句合刷物  
(山崎英彦氏所蔵)



広瀬塵外短冊 (広瀬二郎氏所蔵)

片時て金子のさくら咲にけり 塵外

# 菊間藩時代の人材

明治維新により駿河国は徳川家（静岡藩）の領地となったため、慶応四年（一八六八）七月沼津藩は政府から上総国菊間（現千葉県原市）への移封を命じられ、以後菊間藩と改称した。菊間藩では維新の変革に対応し、それまでの旧弊を打破した新しい制度・組織を採用し、門閥制度を否定した能力主義の人材登用が行われた。

慶応四年七月の藩制改革において、新たに立法局と行法局という藩の最高機関が設けられた。立法機関たる前者には、その長として議正、副長として参知、議員として議長・議衆が置かれた。行政機関たる後者には、長として施政、執行者として幹事が置かれた。この時これらの新職に任命されたのは、議正が三浦千尋ら三名、参知が小林信近ら三名、議長・議衆が渡辺孝・手島精一・田辺貞吉ら十一名、施政が水野重教、幹事が古地茂穂ら三名である。また、各種部局でも、知農局・軍務局・会計局・監察局などが設置され、組織の革新がはかられた。その後、翌明治二年（一八六九）の改革以降は、大参事三浦千尋、権大参事黒沢著通・寺田将美、少参事服部純・田辺貞吉・谷井質といったメンバーが指導部を構成した。

菊間藩時代の行政で最も注目されるのは、三河国の飛び地を治める大浜出張所で少参事服部純が行った新政であろう。新民塾・新民序と呼ばれる庶民のための学校開設、下議院という住民の衆議機関の設置、教諭使による民衆教化、村内の資格再編制と各種役職の新設などである。寺院の統廃合政策をめぐっては浄土真宗の僧侶らの危機感を招き、明治四年大浜騒動と呼ばれる宗教一揆を引き起した。しかし、服部は、江川坦庵に学んだ沼津藩きつての進歩派だったことからわかる通り、決して偏狭な排仏論者などではなく、あくまで開明的な改革を目指した人であった。



本山 漸  
(本山松二氏提供)



田辺貞吉  
(田辺俊一氏提供)  
明治3年3月16日撮影



服部 純  
(松永礼三氏提供)



服部 純書「新民塾」  
(碧南市立新川小学校所蔵)



海軍兵学寮貢進生  
広瀬権六  
(広瀬二郎氏提供)



菊間藩仏式器械体術仕込方  
佐野延朗  
(岡田房子氏提供)



菊間藩兵器司・知關少属  
鈴木雄重  
(鈴木義康氏提供)



(藤岡隆氏所蔵)



(深沢溥氏所蔵)

菊間藩時代の辞令

次に菊間藩の文教面での新しきである。東京の藩邸に移された藩校明親館には洋学局が新設され、英学や数学が教授されるようになった。その中心になったのは、旧幕臣から菊間藩士となった本山漸（一八四二〜一九二〇、旧名高松親次郎）である。本山は、林洞海や緒方洪庵に洋学を学んだ幕府の海軍士官であったが、戊辰戦争に際し榎本武揚の脱走艦隊に身を投じたものの船が座礁したため蝦夷地へは行けず、官軍の追及をのがれるため東京の菊間藩邸にかくまわれ、そのまま菊間藩士になってしまったという変った経歴の持ち主である。明治二年四月には自ら校則を定め、「明親館洋学局同社の童生に授る覚」として公布したほか、『格物入門』『軍用火技書』を明親館蔵板として編集・出版した。

また、菊間藩時代には、海外へ留学する者もいた。明治三年（一八七〇）自費でアメリカへ留学し、のちに岩倉使節団の通訳ともなった手島精一、既にフランスへ留学していたが、明治三年政府の官費留学生として認められた駒留良蔵の二名である。国内の留学では、三年より貢進生として大学南校に入学した杉田勝良（十九歳）、同じく大阪の陸軍兵学寮に入学した松崎連（二十六歳）・高見沢茂（二十二歳）・小熊鉄太郎（十六歳）、同じく海軍兵学寮に入学した広瀬権六・辻邑容吉・中山長明・杉山輯吉らがいる。慶応義塾には、明治二年に鈴木喬（二十二歳）、三年に高見沢八五郎（十七歳）・中野千松（二十二歳）らが入塾している。いずれも彼らは菊間藩の若きエリートたちであった。

- (1) 「雑記」（田辺俊一氏所蔵）より。
- (2) 林口孝「鷲塚騒動」『碧南市史料』第三十四集（一九六五年）。
- (3) 山崎有信「大鳥圭介伝」（一九一五年）などより。
- (4) 柳生悦子「史話まぼろしの陸軍兵学寮」（一九八三年 六興出版）。
- (5) 海軍教育本部編『帝国海軍教育史』第一巻（一九八三年 原書房）。

# 廃藩後・明治〜大正期の活躍

明治四年（一八七二）七月の廃藩置県により菊間藩はなくなり、武士階級も解体され、旧藩士たちはそれぞれ自活の道を求めて散っていった。明治四十五年（一九二二）時点の『旧菊間藩士人名録』によると、旧藩士の住所は、東京市が一六五名、菊間村など千葉県内が九十八名、沼津など静岡県内が七十一名、その他が一三二名となっており、職業では、商人五十九名、官吏四十八名、会社員四十二名、学者・教員三十名、職工二十五名、医師十六名、農業十四名、軍人十名、鉱工業七名、その他十八名などとなっている（不明一九八名）。以下、様々な経歴をたどった旧菊間（沼津）藩出身者のうち、明治・大正期に活躍した人々を二世も含め紹介してみる。

## 官僚・軍人・技術者

明治国家の近代化政策を推進する指導者となった人々には、当然士族知識人が多かったが、沼津藩からも以下のような人々が出ている。

**手島精一**（一八四九〜一九一八）藩士田辺四友の子に生まれ手島右源太の養子となる。菊間藩では明親館洋学局に学び、明治三年アメリカへ自費留学し、帰朝後は文部省に出仕した。明治二十三年（一八九〇）から大正五年（一九一六）に至るまで、東京職工学校―東京工業学校―東京高等工業学校の校長を長くつとめ、現在の東京工業大学の基礎を築き、我が国の工業教育の振興と発展に貢献した。

**本山漸** 前歴は前述の通り。明治二年菊間藩より海軍に出仕し、以後海軍兵学寮大助教・海軍兵学校長・海軍大学校長兼教頭などを歴任し、明治海軍の建設期に寄与し、海軍少将となった。

**中山長明**（一八五五〜？）菊間藩貢進生として海軍兵学寮へ入り、のち佐世保鎮守府海兵団長・台湾総督府海軍副官・横須賀港務部長兼予備艦部

## 実業家

実業界での出世頭は何といっても田辺貞吉である。彼の

**田辺貞吉**（一八四七〜一九二六）田辺四友の長男、手島精一の兄。旧名秀之助。幕末に洋学を学び、菊間藩では少参事に抜擢される。廃藩後は千葉県に奉職したのち政府に出仕、文部省督学局十等出仕や東京府師範学校長をつとめたが、明治十四年官を辞し住友へ入社。明治二十七年には住友本店支配人となり、三十七年に退職するまで幹部として活躍した。その後も共同火災・共同生命・京阪電鉄・日本製絨などの社長として関西の財界で重きをなした。

**広瀬坦** 剣術家としては前述。工部省鉦山寮権中属などをつとめ、のち田辺貞吉の紹介で住友別子銅山支配人となり、日本製銅株式会社社長となる。

**庵地保**（一八五三〜一九三〇）藩士庵地彦五郎保徳の子。旧名欽三郎。兄福太郎保定は刺客として阿部千万多を襲い、のち獄死した人。保は菊間

長などを歴任し、海軍少将となった。藩士中山鎌治の三男。

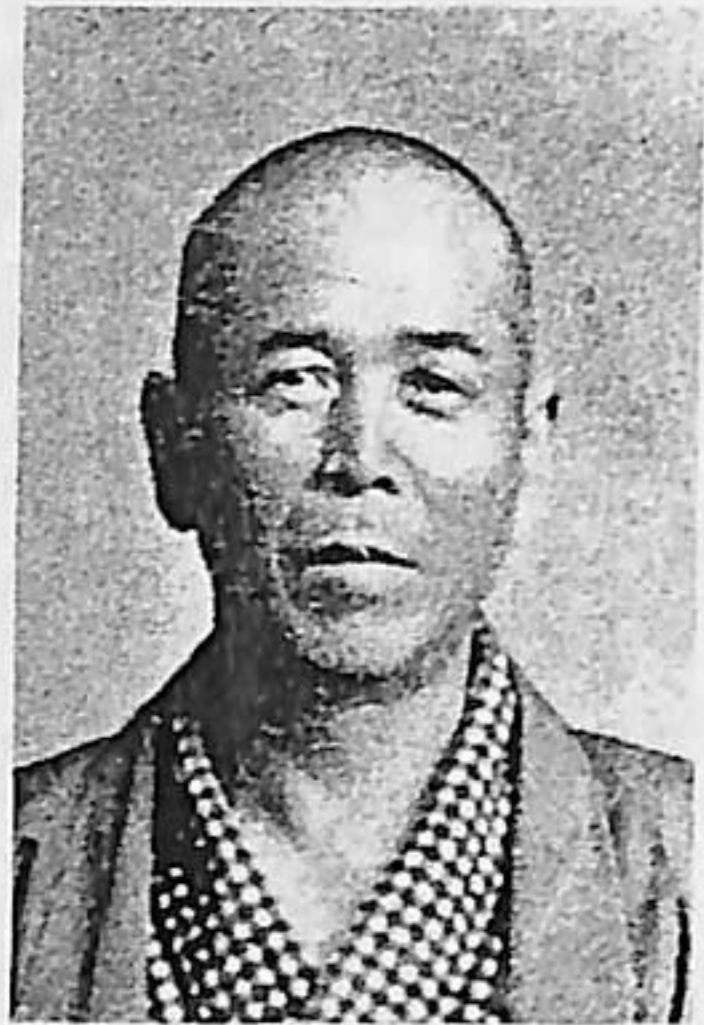
**杉山輯吉**（一八五五〜一九三三）藩士杉山熊叟の子。菊間藩より海軍兵学寮に入ったが、のち工学寮に転じ、明治十二年（一八七九）土木科第一回卒業生として工部大学校を卒業した。以後、工部省・長野県・農商務省・藤田組・台湾総督府などに技師として奉職し、道路・鉄道・港湾などの建設に従事した。退職後沼津や長野県で過ごし、東京で没した。

**本岡鋳次郎**（一八五六〜一九三七）藩士本岡庄吉の子。明治十一年より海軍省に出仕し、兵器局や造兵廠の製図技師を長くつとめた。大砲や水雷の真管などの開発で多くの新発明をしたという。

**桜井鉄太郎**（一八六五〜一九四五）藩士桜井教孝の子。沼津中学校より東京帝国大学法科大学を卒業し、内務省や大蔵省に奉職し、神戸税関長や大蔵省主税・関税・専売各局長などを歴任した。第五代神戸市長。



本岡鋳次郎  
(本岡六郎氏提供)



杉山輯吉  
(杉山熙氏提供)



中山長明  
(岡田房子氏提供)



手島精一  
(『手島精一先生伝』より)



小野兼基  
(『小野兼基自叙伝』より)



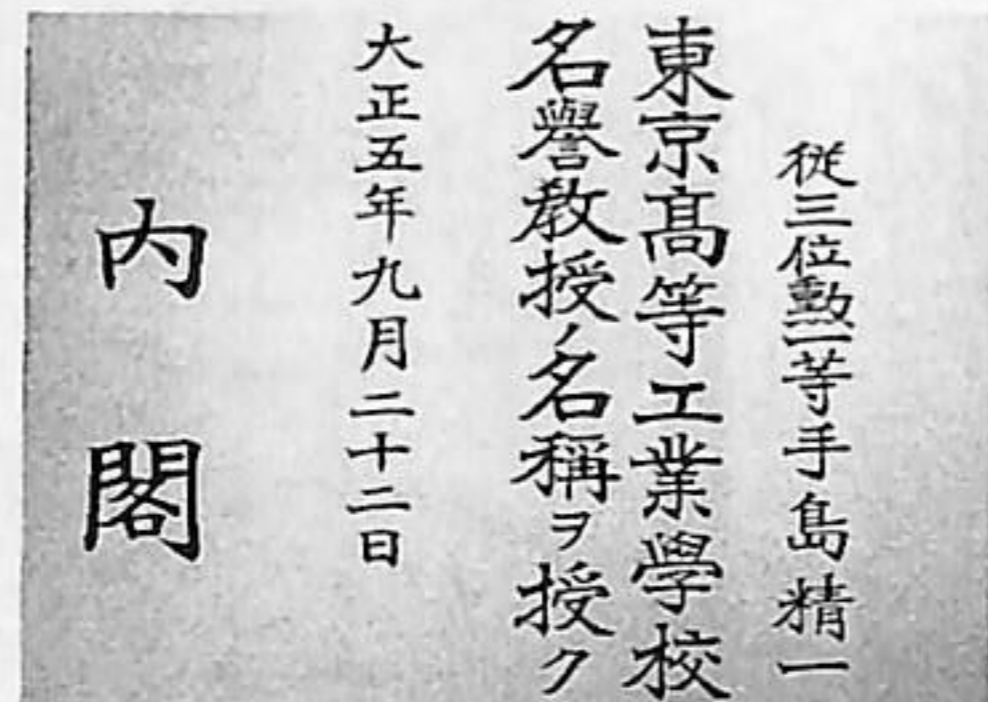
広瀬坦  
(広瀬二郎氏提供)



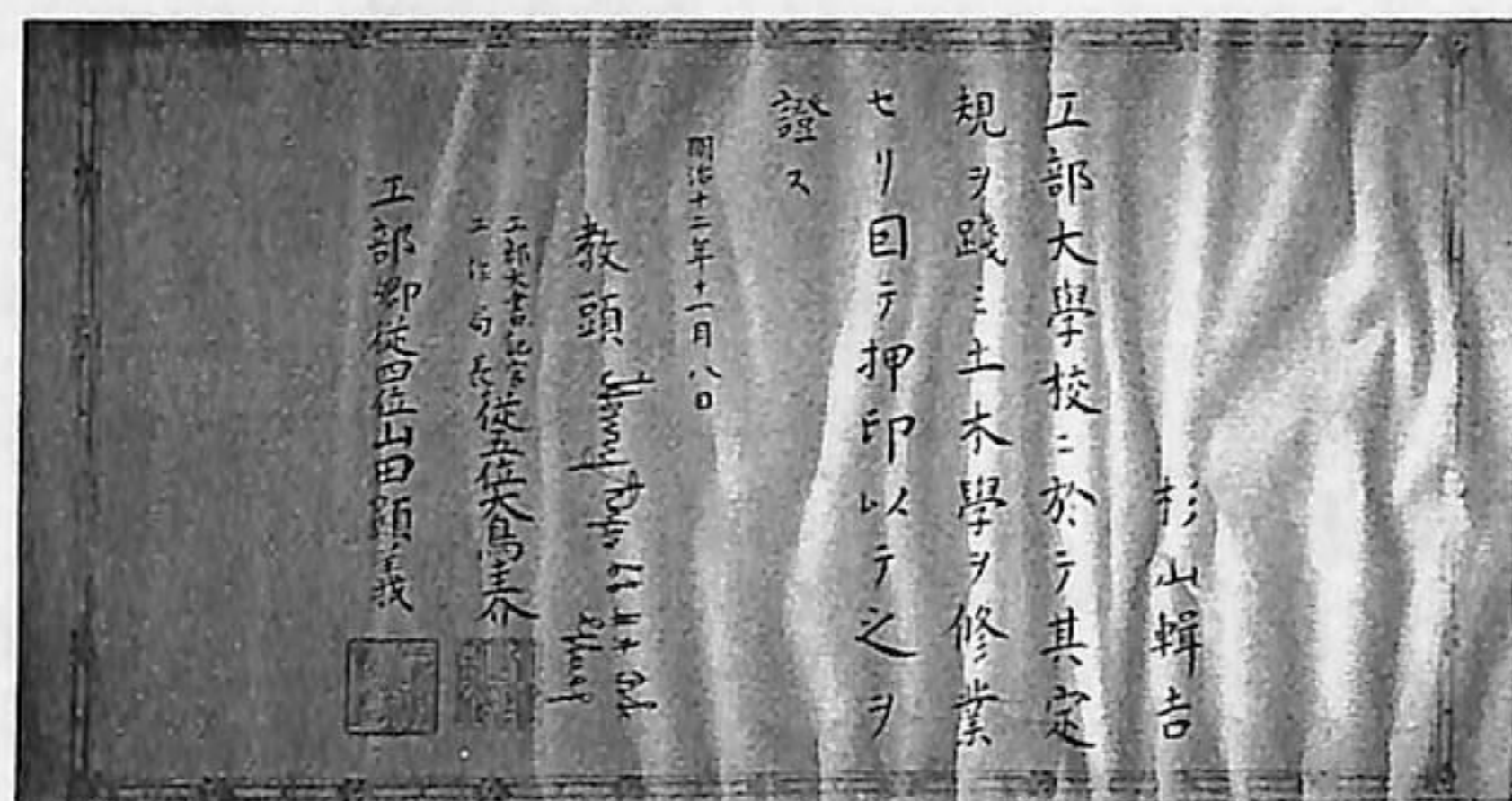
庵地保  
(庵地淑氏提供)



田辺貞吉  
(広瀬二郎氏提供)



東京高等工業学校名誉教授辞令  
(東京工業大学百年記念館所蔵)



杉山輯吉の工部大学校卒業証書  
(杉山熙氏所蔵)



高見沢茂著『東京開化繁昌誌』  
(当館所蔵)  
文明開化の世相・風俗を卑肉とユーモアをもって鋭く描写した  
もの。明治7年(1874)刊。



藩時代には本山漸に英学を学び、海軍に入ったが、のち文部省に転じ、東京府学務課長・秋田県尋常師範学校長などをつとめた。その後野に下り、雑誌『国之教育』を主宰するなど教育ジャーナリストとして活躍。さらに実業界に転じ、住友伸銅場支配人・日本原毛社長などとなった。

小野兼基（一八五九―一九三九） 藩士小野房精の次男。札幌農学校第一期生。北海道庁勤務のち退官、上海紡績会社を経営する。

谷井綱三郎（一八六四―？） 藩士加藤瀬平の三男に生まれ、谷井元次郎の養嗣子となる。東京帝国大学工科大学を卒業し、府県の技師などをつとめたのち、ラサ島燐礦株式会社取締役兼礦業課長となる。

## 学者・医師・ジャーナリスト

金沢久（一八六六―一九二五） 藩士金沢六郎の長男。東京高等師範学校や学習院で英語の教授をつとめる。神田乃武とともに三省堂の『袖珍コンサイス英和辞典』を編纂したことで知られる。

稲村真里（一八六七―一九六一） 藩士稲村真郷の子。沼津中学校から国学院に進み、国学院や神宮皇学館で教鞭をとったほか、各地の神社宮司を歴任。神道学者。

柳下貞橘（一八五一―八二） 藩医柳下知之の養子。明治九年東京医学校を卒業し、和歌山県病院長・高知県病院長をつとめた。

高橋伝吾 東京大学卒。医学博士。愛知県立医学専門学校教諭兼愛知病院院長をつとめ、大正六年（一九一七）五十二歳で没。

高見沢茂 菊間藩貢進生として陸軍兵学寮に入學したが途中退学し、のち民権派の新聞『日新真事誌』編輯者となり、明治八年（一八七五）二十六歳で没。わずかの期間に、『東京開化繁昌誌』『国史初歩』『條約国史約』『甲乙練兵』『世界歴史の緒』『帝王歴代五言』『地誌略』『合衆国古龍』

弥垂大学校表』など、多くの著作を刊行した。

## キリスト者

沼津藩出身者には、キリスト教界で名前を残した者も少なくなかった。

三浦徹（一八五〇―一九二五） 三浦千尋の子。幼名幸三郎。戊辰時には甲州にも出陣。明治八年（一八七五）スコットランド一致長老教会のデヴィッドソンより受洗。以後、東京・盛岡・静岡・三島などの教会で牧師をつとめ、児童用のキリスト教雑誌『喜の音』を編集した。

服部綾雄（一八六二―一九一四） 服部純の子。維新後静岡藩の沼津兵学校で学び、さらに横浜のヘボン塾で英学を学ぶ。明治八年受洗し、明治学院の初代幹事をつとめ、一時牧師にもなったが、のち教育界に転じ、富山・岡山の中学校長となる。明治四十一年岡山から衆議院議員に当選し、大養毅の立憲国民党に参加。排日問題解決のため渡米中客死。

武田芳三郎（一八六一―一九二二） 藩士武田林蔵の三男。明治十二年（一八七九）静岡師範学校一等師範学科を卒業。駿東郡中土狩村の循誘舎の教員をつとめた。のち上京して青山神学校に入り、メソジスト派に入信、以後牧師として麻布教会などにつとめたが、その後牧師を辞し、新聞記者を経て、妻戸板関子が設立した戸板裁縫女学校に携わった。

尾崎容（一八五二―一九一六） 藩士尾崎省の子。菊間藩では少得業生に任命される。ニコライ（のち大主教）に師事し、明治八年以前にギリシア正教に入信、伝教者として伊豆にはじめて正教を伝える。ロシア語を得意とし、大阪税関の通訳もつとめた。洗礼名アナトリイ。

山崎兼三郎（？―一九二六） 俳人山崎正處の子。幕末には藩校の句読師をつとめていた。廃藩後は父とともに伊豆に移り、小学校の訓導をしていたが、明治八年ギリシア正教に入信（洗礼名サワ）、以後伝教者として伊豆や宮城県で布教にあたった。なお、彼の実弟小野帰一は主教にまでなっ



金沢 久  
(金沢暁氏提供)



柳下貞橘  
(柳下貞之氏提供)



尾崎 容  
(尾崎明氏提供)



山崎兼三郎  
(尾崎明氏提供)



三浦 徹  
(日本基督教団高輪教会提供)



服部綾雄  
(松永礼三氏提供)



武田芳三郎  
(『鳥居坂教会百年史』より)



渡辺楠馬  
(渡辺孝尚氏提供)



瀬川 務  
(瀬川良弘氏提供)



瀬川邦衛  
(瀬川賢二氏提供)

た日本の正教会の最有力者であった。<sup>14</sup>

## 地域に生きた人々

以上紹介したような各界で活躍した人々を除き、大多数の旧藩士たちは近代市民社会の中に埋没していった。地域の中で庶民として生きた彼らの中には、行政・教育・医療など様々な方面で足跡を残した者もいる。廃藩直後より千葉県の官吏や学校教員の中に旧菊間藩士族が多いのは当然であるが、それ以外に郷里である沼津やその周辺にもどり、静岡県に定住し、地域に貢献した者も少なくない。岩城魁や深沢雄甫については既に紹介したので、ここでは明治以降沼津の周辺地域に何らかの足跡を残したそれ以外の旧沼津藩士族について述べることにする。

渡辺楠馬（一八五二〜一九二二） 小田原藩士河野小八の子に生まれ沼津藩士渡辺三内の養子となる。廃藩後木更津県・千葉県の官吏となり、のち静岡県に転じ、君沢郡久連村戸長や熱海町戸長をつとめた。

瀨川務 藩士瀨川士弘の長男。旧名広次。菊間藩史生をつとめ、廃藩後木更津県で地巻掛、千葉県十五等出仕となる。大正三年七十九歳で没。

瀨川邦衛 務の弟。廃藩後伊豆に移り、明治二十九年（一八九六）より三十六年（一九〇三）まで西浦村長をつとめた。

岩下基義（一八五二〜？） 藩士岩下審一の子。菊間藩時代には伊豆の平井出張所詰として民政事務に従事。廃藩後は足柄県に出仕、以後、君沢・田方郡書記、下狩野村長、沼津町助役、葦山村長などを歴任。<sup>15</sup>

長岡浜之助 藩士長岡孫六の嗣子。田方郡北狩野村長をつとめた。

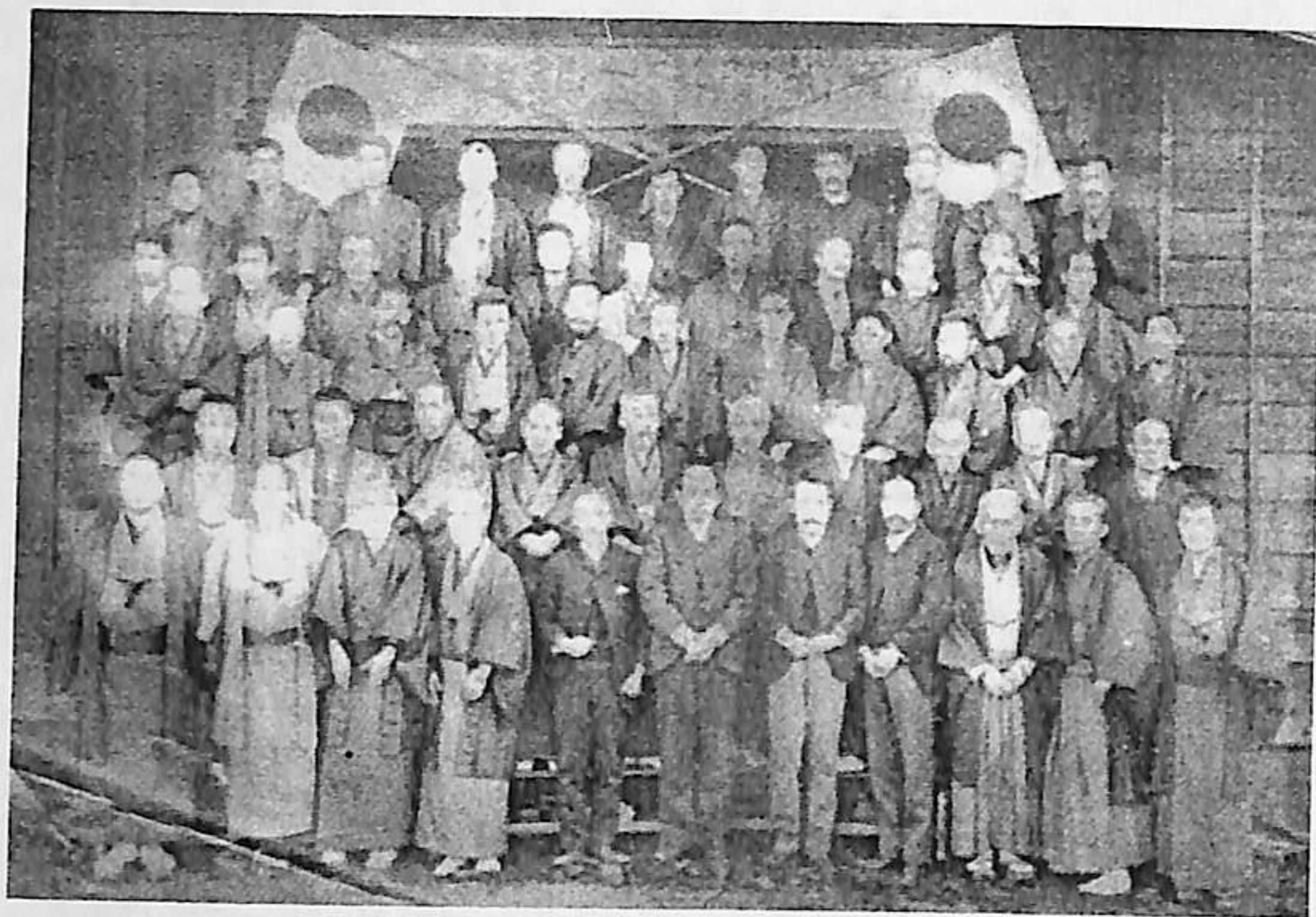
持田誓 足軽小頭持田清十の子か。明治六年（一八七三）より約十年間駿東郡須山や同郡大岡村で小学校訓導・校長をつとめた。明治四十年（一九〇七）六十一歳で没。<sup>16</sup>

草間学 藩士草間小太夫の子。旧名学之介。沼津藩では藩校の記宝助教を

つとめていた。明治五年（一八七二）に田方郡南条村に設立された小学校因学庵舎の教員をつとめた。<sup>17</sup>

稲垣芳三郎 葦山塾で高島流砲術を学んだ稲垣源次兵衛の子。明治十年代中頃は駿東郡上土狩村に住み、新聞抜萃の雑誌『奇要可記叢誌』を編集・刊行していた。地元の演説会・懇親会にもしばしば参加。<sup>18</sup>

- (1) 手島工業教育資金団『手島精一先生伝』（一九二九年）。
- (2) 古林亀治郎『現代人名辞典』（一九二二年）。
- (3) 宇田正『明治十年代上信地方道路開闢調査活動の一展開』史料紹介『追手門経済論集』12-3、13-2（一九七八年）。
- (4) 田辺尚雄『田辺尚雄自叙伝』（一九八一年 邦楽社）などより。
- (5) 『住友銀行八十年史』（一九七九年）などより。
- (6) 岩手大学武田晃二氏提供資料などより。
- (7) 小野基樹編『小野兼基自叙伝』（一九三九年）。
- (8) 猪野三郎編『大衆人事録』昭和三年版（一九二七年）。
- (9) 佐伯好郎『金沢久君を憶ふ』『英語青年』53-4（一九二五年）。
- (10) 『新註稲村真里諱辞集』（一九五四年 稲村真里先生米寿祝賀会）。
- (11) 高橋伝吾君碑（東京・真珠院所在）より。
- (12) 『日本キリスト教歴史大事典』（一九八八年 教文館）などより。
- (13) 秋山繁雄『明治人物拾遺物語』（一九八二年 新教出版社）。
- (14) 『記録』（修善寺ハリストス正教会所蔵）より。
- (15) 高室梅雪『静岡県現任者人物一覽』（一九〇一年）。
- (16) 持田製薬株式会社『未来医療への挑戦―創業七十周年記念誌』（一九八四年）などより。
- (17) 静岡県立教育研究所編『静岡県教育史』通史篇上巻（一九七二年）。
- (18) 『沼津新聞』一〇九、一一二、一一八号記事（明治十五年）などより。



旧菊間藩士懇親会記念写真  
(岡田房子氏提供)



旧菊間藩第五十回親睦会記念写真  
(本山松二氏提供)



旧藩主水野忠敬と旧家臣深沢雄甫、庵地保、松村誠、神田信三郎、三浦徹。明治33年  
(深沢溥氏提供)



最後の沼津藩主水野忠敬  
(尾崎明氏提供)

明治17年子爵に列せられ、のち宮内省に出仕。1851~1907。この写真は明治11年に旧藩士尾崎容に贈ったもの。

旧藩主と藩士、あるいは旧藩士同志の交流・交際は、明治・大正・昭和戦前を通じて続いていたようである。

史料 慶應三年丁卯春二月改

沼津・江戸・大浜・五泉御家臣姓名録

大浜御役所控 (杉浦弘氏所蔵)

御家老職格 土方九郎次郎

卯月隱居 鈴木重郎左衛門

侍大将兼 清水要人  
卯七月5 黒沢弥兵衛  
○ 杉山東

同見習 程田玄悦

御城中出 (貼紙)

御政事掛 三浦小平太  
御政事掛 水野伊織

御側御用人 土方留之助

御政事掛兼 柴田令輔

辰年5 服部純平  
御番頭 鈴木主税

同格 柔術師範兼 竹内亥三郎  
○ 戸塚彦助

城之助養父隱居 兵学師範軍師

獨礼 谷正太夫

御者頭 金沢六郎  
同 酒井門太夫  
御者頭 清水久太郎

奥御医師 程田玄悦

大寄合 遠山瑞碩

郡御勘定奉行 諏訪三郎兵衛  
御留守居 都筑新之丞  
御者頭 吉田喜左衛門

御馬預・馬術師範 大須賀悠介  
(貼紙)

御者頭 秋山六郎兵衛

同 浜島鯨之助  
同 鈴木弥一左衛門

惣旗奉行御使番心得

奥御用役 中山常右衛門

御納戸 多田紋右衛門

卯五月御免 同 青地市右衛門  
奥御用役 谷井林藏  
御納戸 山田翁助

御者頭・学校目付介 大岡台助

御目付 石川六三郎

御郡代 遠藤甚八郎

寄合 石川七十郎

御勘定奉行 根井早太

御刀番・御近習 雑色鉄之助

御近習 土方斧次郎  
御近習 中山準蔵

御納戸 梅村四郎兵衛

御納戸介 近藤直記

卯六月本役 渡辺牧太  
御勘定奉行 神谷源太夫  
同御使番 稲垣名兵衛  
調役頭取 竹内申吾

郡町御勘定奉行・学校目付 小林貫一

御郡代 程田玄一郎

御供頭・御近習 松崎太助  
卯二月廿八日 伊藤半六  
同 草間小太夫

御書翰方・御留守居使者心得 御役御免 中山隼之介

御馬預見習・馬術教授並 鈴木源左衛門

御供頭御近習・柔術教授 栗原与助

毛利胤之助

御書翰方 福岡十左衛門

御番士・柔術教授 戸塚彦九郎

御近習 吉田直

御番士 土方二郎

同 竹内健之助  
同 丸山貫太郎

調役頭取 丸山貫太郎

調役頭取 富沢門弥

御目付 田中右膳

御番士 三浦幸三郎  
同 杉田新五郎

御御取次 森下榎之助

劍術師範・御御取次 駒留判次  
○

御貸附掛頭取・御代官兼 松村六郎  
御年転席 鈴木五郎作

寄合格 奥詰御医師 深沢雄甫  
同 祐乘坊元東  
御次詰御医師・文学ノ助教手伝兼 島津元圭  
同文学ノ教授兼 駒留陋齋  
御馬廻 川上不羨  
御茶道 庵地彦五郎  
御馬役見習

調役 大須賀一郎

御休息所掛頭取御賄 大野久太夫

御次詰・劍術教授並 勝見織之丞

御番士 横田七之助

調役句讀師 鈴木銈之丞  
御次詰 吉田倭市

御番士 大河内与一

病死 同 鈴木園右衛門

御御取次 小松助三郎

御御取次 御使番介 南條弥左衛門  
御次詰 神戶保之祐

御番士御武器掛・砲術教授 黒沢錦蔵

御御取次 齋藤謙介

卯二月廿八日 御納戸・記宝助教 兼 卯五月十五日 文学教授兼 記宝是迄之通被仰付 高柳源七

劍術師範・御御取次兼 小野順蔵  
御番士 八島市蔵  
同 調役 田中健三郎  
御次詰 久米延蔵  
吟味役 杉浦留三郎  
御番士 望月周祐

同 神戶甚右衛門

卯二月廿八日 御書翰 木村保蔵

御次詰 榊原八郎治

御番士 平林環

御御取次 劍術教授・御武器掛兼 加藤小右衛門  
御番士 浜島太郎作

吟味役 石橋清三郎  
御使者番 二木勘之助

御番士 二見善太夫

御次詰 五十川鈍郎

同 谷井藤蔵  
御番士 藤重有衛門

御代官町掛兼 原川直左衛門

御番士 遠藤量介

同 入江甚之丞  
春五郎様御附 田辺直之丞  
御次詰 原田考太郎

槍術教授・御番士 谷城之助  
御番士 稻垣奎允  
同 根井銀次郎  
同 原田寿太郎  
同 土屋清五郎  
同句讀師 神谷長十郎  
御次詰 角田太橋  
御番士 林又六

御藏奉行 小野官十郎

御休息掛 石井官次

調役 伊庭丈之助

御番士 都筑弘

同 菅野右馬允  
同 笠井音松

御次詰 高見沢稠

御番士 井菅銀之丞

御番士 諏訪直吉

外御供頭 深美岩吉  
御番士 佐々木勘兵衛

御御取次 小高謙次郎

同 近藤慎七

同句讀師介 関勘四郎  
御次詰 手島悖之介  
御番士 米山磯次郎

同 杉山吾助  
留物方 鎌倉次郎作  
御代官町方掛介 田所八五郎  
御番士 伊藤銳三郎  
記宝助教・御番士 草間学之助  
御番士 中山信太郎  
同 清水富士郎  
同 潮田三郎  
同 島田鏡之助

御馬役見習 堀江信次郎  
御番士 梅村喜八郎  
御番士御武器掛 藤田泰藏  
御番士 太田文治  
同・句読師 村瀬登  
同・同 富沢兵馬  
調役・句読師 戸塚武允

御次詰 川島銑太郎  
御番士 大須賀格  
御次詰 多田鏐太郎  
御番士 稻垣兵藏  
同 栗原健太郎  
留物方 森下春太郎  
五泉御代官 豊田儀七  
御藏奉行介 芹沢五左衛門  
五泉御代官 寺田信三郎  
沼津御代官 中村銳次郎

御馬廻末席  
御次詰御医師 照島春丈  
同幼年  
御番士 鶴見作之助  
成田金弥  
小川鍊吉  
毛利又市  
御馬廻格 齋藤太藏  
與附・礼節方 齋藤太藏  
御次詰御医師 柳下養齋

奥詰御医師 祐乗坊庸軒  
御番醫師 喜多島周悦  
程田玄隆  
深沢要橘  
松山養民  
駒留謙齋  
照島太郎

御中小性 中村玄三  
御番方 山崎柳藏  
同 長岡孫六  
卯正月軛席 五泉御代官  
御番方 本田喜久右衛門  
同 山田彦市  
同 河野慎之輔  
同 青木半右衛門  
同 前田新左衛門  
同 江本勘三郎  
留物方 梯崎伊八郎  
射術教授御番士 鈴木權之丞  
留物方 田中釜次郎  
御番方御武器掛 山崎平右衛門  
御番方 渡辺祥造  
吟味役 鳥田友之助

御中小性格  
小役人と頭御茶所世話役兼 外木四郎次  
御番方 岩城岩輔  
卯年中隱居 久保田平助  
同 池田鍵藏  
御徒士と頭句読師 船見鍊次郎  
同 青木垢之助  
同 天野紋次郎  
同 高城安五郎  
御徒士席 市川齋助  
中之口 平井所右衛門  
老年旁不及勤 森田記一郎  
奥御支関番 大橋新五郎  
小役人と頭御茶所世話役 齋藤庄左衛門  
下賄 富田寿三郎  
御徒士目付 湯山藤四郎  
中之口 宇佐美昌平  
中原御徒士目付 小高伝次  
中之口・御納戸下役介勤番 安孫子兵次  
御納戸下役 高部常五郎  
御作事方 太田九郎次  
中之口 白田徳太郎

御番方 内野繁太郎  
同 河原井彦次郎  
御作事吟味役 平林徳次郎  
御番方 井沢安次郎  
同 劍術教授並 秋山喜久三  
御番方 小松周之助  
卯正月軛席 五泉御代官  
御番方 中村銳次郎  
御番方 奥田鉄治  
同 柳元正次郎  
御右筆 川久保新一郎  
吟味役 外木森右衛門  
句読師兼留物方 二木健藏  
御番方 菊地牧之助  
同 別所彦四郎  
留物方 杉山宜助  
御賄 橋本鍊之輔  
御番方 鶴沢勇馬

御貸付掛・吟味役兼 原川恵七郎  
御番方 藤重鈍五郎  
同 杉浦源十郎  
同 石橋雅吉  
同 遠藤長造  
卯年中留物方 中村源八  
御番方 小原直之進  
卯七月中病死 井沢文次郎

修業中無役 神田来助  
御作事方御林方兼 山下庫太  
中之口・御留守居御物書介二而勤 山崎要藏  
番 卯六月本役江戸勝手 杉山熊次郎  
御作事方御林方兼 川澄源三郎  
句読師学校御徒士目付 小原三一郎  
御勘定所下役兼御貸付下役 外木晋之助  
御徒士目付 岩城魁太郎  
中之口 島津精一郎  
同 戸田健之助  
大浜郡方手代頭取格 勝呂八平  
五泉同 松山庇左衛門  
中之口 宮本弁次郎  
同 加藤助作  
同 久米悠之助  
学校御徒士目付 前田俊吉  
修業中 転席 豊田静太郎  
中之口 柳沢喜太郎  
同 飯島為八  
御徒士目付 高見沢藏次郎

同 佐々木弁之助  
同・御武器掛 江本三津三  
同・句読師 小野邦衛  
同・同 加藤連之助  
御番方 田辺秀之助  
同 金崎元弥  
御休息掛 太田瀧五郎  
吟味役 小野恒三郎  
御納戸下役 齋藤敬三郎  
御番方 林条藏  
同 江本岩藏  
同 榎木甫助  
同 星野市太郎  
同 本岡保兵衛  
留物方 古地保作  
御作事方 神谷乙之助  
御番方 寺田弥十郎  
御右筆 駒村俊太郎  
卯六月留物方 柳沢一馬  
劍術教授・御番方兼 大野愛之助  
御番方 梯崎源吉郎  
同 鈴木広次郎  
御番方 米山梅藏  
同 森貢三郎  
同御武器掛 小林録藏

御勘定所・地方町方書役 渡辺鋼四郎  
中原御徒士目付 山田七之助  
御徒士 卯六月御留守書役 小川柳之助  
御徒士目付・御賄勤方出役 三橋運八郎  
御徒士目付 春日常藏  
槍術修業中 井出源次郎  
御徒士・劍術教授並 広瀬鉦太郎  
学校御徒士目付 峯島啓次  
中之口句読師 山崎兼三郎  
同 山田銀藏  
御代官差図次第 転席 中村久太郎  
中之口 久保田泰太郎  
中之口 川口恭助  
句読師御徒士目付・砲術教授並学 校御徒士目付心得 五十嵐新六  
中之口 榎木織之助  
御徒士目付介 青地齋  
中之口 小田嘉十  
郡方手代頭取 稻村繼藏  
中之口 前田信之丞  
御作事御林方兼 芹沢直兵衛

御作事吟味役 本田粒太郎  
御番方 渡辺清太  
御留守居御物書 伴兼太郎  
卯六月御右筆 吉村長次郎  
御勘定所下役 太田金次郎  
御番方 望月直樹  
同 浜島藏  
同 石井金弥  
御勘定所下役 今井篤平  
御勘定吟味役介 石橋庸三  
御賄 豊田静太郎  
芹沢純太  
中村久太郎  
鶴見鍾太郎  
橋本敬三郎  
桜井平四郎  
御勘定所吟味役 雨宮彰之助  
同幼年 神戸文也  
御茶所勤 程田精一郎  
御茶所勤 宮山真也  
同 村瀬鎮也  
同 大河内源也  
同 木村廉也

御作事吟味役 本田粒太郎  
御番方 渡辺清太  
御留守居御物書 伴兼太郎  
卯六月御右筆 吉村長次郎  
御勘定所下役 太田金次郎  
御番方 望月直樹  
同 浜島藏  
同 石井金弥  
御勘定所下役 今井篤平  
御勘定吟味役介 石橋庸三  
御賄 豊田静太郎  
芹沢純太  
中村久太郎  
鶴見鍾太郎  
橋本敬三郎  
桜井平四郎  
御勘定所吟味役 雨宮彰之助  
同幼年 神戸文也  
御茶所勤 程田精一郎  
御茶所勤 宮山真也  
同 村瀬鎮也  
同 大河内源也  
同 木村廉也

御中小性格  
小役人と頭御茶所世話役兼 外木四郎次  
御番方 岩城岩輔  
卯年中隱居 久保田平助  
同 池田鍵藏  
御徒士と頭句読師 船見鍊次郎  
同 青木垢之助  
同 天野紋次郎  
同 高城安五郎  
御徒士席 市川齋助  
中之口 平井所右衛門  
老年旁不及勤 森田記一郎  
奥御支関番 大橋新五郎  
小役人と頭御茶所世話役 齋藤庄左衛門  
下賄 富田寿三郎  
御徒士目付 湯山藤四郎  
中之口 宇佐美昌平  
中原御徒士目付 小高伝次  
中之口・御納戸下役介勤番 安孫子兵次  
御納戸下役 高部常五郎  
御作事方 太田九郎次  
中之口 白田徳太郎

修業中無役 神田来助  
御作事方御林方兼 山下庫太  
中之口・御留守居御物書介二而勤 山崎要藏  
番 卯六月本役江戸勝手 杉山熊次郎  
御作事方御林方兼 川澄源三郎  
句読師学校御徒士目付 小原三一郎  
御勘定所下役兼御貸付下役 外木晋之助  
御徒士目付 岩城魁太郎  
中之口 島津精一郎  
同 戸田健之助  
大浜郡方手代頭取格 勝呂八平  
五泉同 松山庇左衛門  
中之口 宮本弁次郎  
同 加藤助作  
同 久米悠之助  
学校御徒士目付 前田俊吉  
修業中 転席 豊田静太郎  
中之口 柳沢喜太郎  
同 飯島為八  
御徒士目付 高見沢藏次郎

御勘定所・地方町方書役 渡辺鋼四郎  
中原御徒士目付 山田七之助  
御徒士 卯六月御留守書役 小川柳之助  
御徒士目付・御賄勤方出役 三橋運八郎  
御徒士目付 春日常藏  
槍術修業中 井出源次郎  
御徒士・劍術教授並 広瀬鉦太郎  
学校御徒士目付 峯島啓次  
中之口句読師 山崎兼三郎  
同 山田銀藏  
御代官差図次第 転席 中村久太郎  
中之口 久保田泰太郎  
中之口 川口恭助  
句読師御徒士目付・砲術教授並学 校御徒士目付心得 五十嵐新六  
中之口 榎木織之助  
御徒士目付介 青地齋  
中之口 小田嘉十  
郡方手代頭取 稻村繼藏  
中之口 前田信之丞  
御作事御林方兼 芹沢直兵衛

小役人と頭世話役兼

御徒士目付 杉浦兵吉  
御徒士目付 中田助右衛門  
御納戸下役 齋藤鼓町御徒士目付心得  
寺田綱次郎  
御徒士目付 卯年本役  
新村友次郎

町方小頭介 渡辺乙蔵  
中之口 和田鼎之助  
御徒士 本岡文之介  
同 太田鍾之助  
中之口 山本善作  
同 浅井彦助  
同 鷺見謹吾  
同 木次幸之丞  
同 重見彦兵衛  
愛宕下御徒士目付 金沢丈右衛門  
中之口 萩原秀平

大浜郡方手代 杉山廉助  
中之口 梯島為弥  
御徒士 高城安之助  
中之口 河原井次郎  
同 小原方平  
同 金崎林太郎  
同 太田鐘之助  
御料理人 小林栄左衛門

中之口 日吉倉之助  
御勘定所下役 伊藤祐之助  
御徒士目付 池野源三郎  
大浜郡方手代 岡田程八郎  
町方下役御貸付掛下役  
御勘定所下役 天野采十郎  
中之口 今井孝平  
小松周之祐  
木原源次郎

同幼年 阿曾啓之助  
同幼年 諏訪勝齋  
大塚寿齋  
小能権齋  
鶴沢銀齋  
古地立齋  
遠藤栄齋  
小林恵齋  
前田節齋  
吉村長齋  
木塚錦一郎

同末席 江本津守  
中之口 五泉郡方手代 伊藤弘作  
小役人 御坊主 西村桂之助  
御徒士目付 小安又三郎  
御徒士目付 木部逞之助

御林方下役御庭方

御坊主 齋藤助七  
郡方手代 寺田勘四郎  
大浜同 吉岡代次郎  
同幼年 木原熊次  
星野栄佐  
矢部金佐  
大場元佐  
山本鉆茶  
鈴木正悦  
高須三益  
小野延賀  
富田錦佐  
柳沢千悦  
杉浦甲悦  
齋藤良佐  
石井勝佐  
杉山孟甫  
石原周悦  
浦野愛太郎  
森盛伯  
小原銑益  
川口八佐  
野口銑賀  
岡田常吉

同 高見沢甲子郎  
同 平井次左衛門  
修業中 山田宣之輔  
御勘定所・地方町方書役 芹沢凌一郎  
郡方手代 渡辺三内  
御坊主 藤岡弥三郎  
御坊主 森銀八  
学校御徒士目付 寺尾包蔵  
御坊主 岡本良之助  
同 森田祝之介  
同 芹沢伝之助  
郡方手代・御貸付掛下役町方下役 水口種作  
御坊主 小川亀之丞  
同 齋藤録助  
同 野口平蔵  
同 江原源佐  
同 黒野鏡之助  
同 平賀萬之助  
同 小高良賀  
同 福井団次  
足軽小頭 西村清之助  
大浜郷方 内藤駿太郎  
御坊主 市川玖次郎  
同 飯島豊悦  
同 芹沢文悦

五泉詰 星野貞助  
御坊主 柏崎雄平  
同・貝太教授 生田弥太郎  
御徒士目付 渡辺彦九郎  
御坊主 河野勝太郎  
修業中 大橋勘吾  
御坊主 宇佐美源十郎  
御勘定所下役 酒井柳蔵  
卯六月本役 田村新吉郎  
御徒士目付 加藤善右衛門  
郡方手代江浦詰 辻邑登七  
御徒士目付 奈良橋儀右衛門  
御坊主 角谷玄助  
御坊主 杉山弥之助  
御徒士目付 矢田彦次郎  
御坊主 西原久之丞  
御納戸下役 大橋邦之輔  
御仕立師 谷井綱一郎  
御徒立師 佐藤与七

町方下役・郡方手代・御貸付掛下役兼 瀨川広次  
御坊主 宮島甚吾  
同 角谷虎之助  
同 新井石五郎  
同 今井孝平  
同 山本三男弥  
同 関野健蔵

小役人並

經師方 小林勇次郎  
鑄物師 野口峯吉  
御坊主 星野太市  
職人 御坊主 中込林蔵  
弓師 谷仙之助  
矢師御勝手小頭介 増永右助  
大工 伊藤辰五郎  
同 水田善太郎  
御庭方 吉野庄之助  
御坊主 矢部幸左衛門  
矢師 岡村一八郎  
鑄物師見習 佐藤常次郎  
御目見格 中雀御門番 山本伝平  
五泉 大木与十郎  
御坊主手長 林正輔  
手廻差配人 加藤緒五郎  
御坊主手長 大高新兵衛  
足軽小頭 望月古太郎  
中雀御門番 杉山次左衛門  
大工 齋藤徳蔵  
御勝手小頭介 水間市五郎  
御坊主手長 渡辺富五郎  
中雀御門番 山本龜八  
同 中村孫助

奥御玄関番 富田政右衛門  
大浜郷方 藤岡浜之助  
中雀御門番 三惠元兵衛  
足軽小頭 大竹儀助  
中雀御門番 秋場弥三郎  
同 近藤源七  
同 島村順次  
同 関石太郎  
御坊主手長 佐藤民次郎  
郡方手代 芹沢富太郎  
大工 菅原喜兵衛  
郡方手代 矢内恕平  
大浜郷方 杉浦泰五郎  
中雀御門番 林六之輔  
足軽小頭 持田清十  
同 平野三太  
中雀御門番 原田又助  
同 深沢常次郎  
同 林三郎助  
同 馬場駿三郎  
見付取 山下清八  
下賄介 卯年本役 小林三郎次  
半髪 渡辺伝蔵  
御坊主手長 菅谷伊助  
半髪 氏家逸平  
御蔵方 吉岡代次郎  
下賄介 高橋又助

御蔵方 菅谷徳之助  
御徒士目付 芹沢五一郎  
卯七月中病死 潮田安太郎  
御坊主 齋藤玄次郎  
同 山口高根  
同 浅井祐次  
同 深沢弁次  
同 萩原秀次  
御徒士目付介 大井平左衛門  
足軽小頭 高橋信作  
御坊主 菊川卯三郎  
御料理人 伊藤鉄五郎  
同 遠藤喜七郎  
同 寺島孝之助  
修業中 大須賀金八郎  
御納戸下役 太田申太郎

大浜郡方手代見習 勝呂箱之助  
御坊主 萩原長重  
同 龜島善之助  
同 青木衛毛七  
同 白鳥喜三郎  
御坊主 前田善左衛門  
郡方手代 持田亦弥  
御坊主 小寺泰輔  
同 海野時三郎  
同 中野銀之介

同 中野銀之介

柔術教授並・修業中

藍沢重次郎  
 半髪 今井林助  
 足軽小頭 宮川栄次郎  
 郡方手代 今井梅藏  
 同 岩下源三  
 御勝手小頭 早房品次郎  
 郡方手代 高安兵衛  
 同水窪詰 江本新三郎  
 大工 野田太吉  
 半髪 三島久七  
 半髪 久保田半七  
 同 石原虎次郎  
 同 太田清之助  
 御長柄小頭 戸上平八郎  
 町同心 杉山季四郎  
 郷同心 三惠実藏  
 同 江本繁次郎  
 大工 野田亀吉  
 足軽小頭 成岡林次郎  
 半髪 岩崎栄之助  
 同 加藤善太  
 足軽小頭 久保直四郎  
 半髪 沼生利兵衛  
 五泉郷方 大木弟次  
 郡方手代伊豆島田詰  
 佐野巳之次郎  
 郷同心 望月比羅助

役順左之通

同 内野猪之藏  
 槍師 杉浦軍次  
 半髪 平賀由之助  
 足軽小頭 岩田弥平次  
 同 桜林平  
 同 齋藤仲藏  
 半髪 大石猪之太郎  
 郷同心 三矢四郎八  
 大浜郷方 西邨貞次郎  
 大工 齋藤千代吉  
 同 金刺類四郎  
 同 和田錠吉  
 中雇番 重見丹士  
 大浜郷方 北島頼助 下  
 郷方 柏崎又四郎 上  
 千頭和萬平  
 御家老 同格  
 御年寄 同末席  
 同見習 御城代  
 御城代格 御側御用人  
 御番頭 御側御用人格  
 御番頭格 御側御用人格  
 御留守居 御者頭  
 御取次 郡御勘定奉行  
 町奉行 寺社奉行

右寄合以上之御役

御長柄奉行 御目付  
 調役頭取 御目付勤方  
 調役頭取勤方 御納戸  
 御用役 奥御医師  
 御書翰方 惣旗奉行  
 三州御郡代 大砲組頭  
 御取次 御供頭  
 御刀番 御近習  
 御次詰 外供頭  
 調役 御右筆  
 下乗目付 御作事奉行勤  
 吟味役頭取 方  
 御次詰 御番士  
 奥詰 御醫師 御番醫師  
 御茶道 御番醫師  
 右御馬廻相当 御番醫師  
 沼津御代官 吟味役  
 五泉 奥附  
 御賄 御休息掛  
 留物方 御休息掛  
 御番方 御休息掛  
 右御中小性相当 御休息掛  
 御徒士与頭 御休息掛  
 右同格相当 御休息掛

御勘定下役

御勘定下役 町方下役  
 御作事方 御徒士目付  
 手代頭取 手代頭取格  
 小役人与頭 御料理人  
 御徒士  
 右御徒士相当  
 郡方手代 御留守居御物  
 御納戸頭役 書  
 下賄 奥御玄関番  
 御坊主 御休息掛下役  
 右小役人相当  
 足軽小頭 町方小頭  
 御勝手小頭  
 右小役人より御目見格相当  
 此外  
 学校奉行 学校目付  
 同所御徒士目付 学校奉行下役  
 右之通  
 祭酒 侍読  
 文武教授 文学  
 右寄合以上之御役 文事助教  
 文武教授並 記宝

右御馬廻相当之御役

句読師  
 右寄合より御目見以上之御役

御蔵奉行 御貸付掛  
 御蔵方 三役所書役  
 御貸付掛下役

右相当之廉并御役順無未夕二仰出  
 無之

武術師範  
 右文学之侍読と同様

無役之分

五十川長  
 服部純平  
 五十川静  
 服部弁内  
 高部善太郎

御役々兼帯之向壁へハ

武術師範或者教授

仮御取次或ハ御番士カ御番方之類

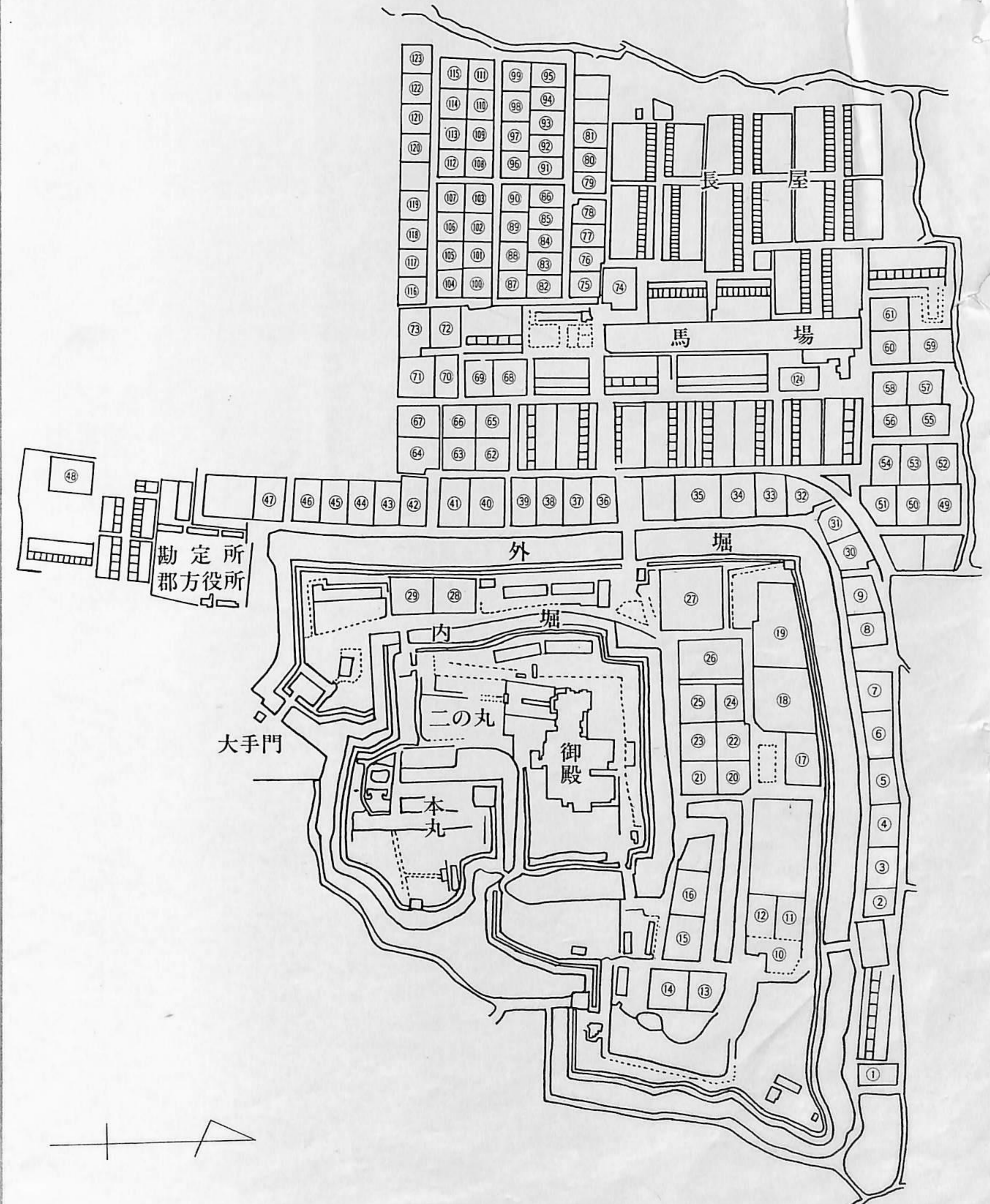
右之通認有之候向者総而先キニ認候を司役次ニ認候ヲ兼役同シ教授ニても司役之人も兼役之人も有之

三河国碧海郡沼津藩中

水野出羽守内  
 杉浦泰五郎所持

# 沼津城藩士屋敷割図

文久3年 駿河国駿東郡沼津御城地老  
分一間積絵図（鳥田雄二氏所蔵）より



- |          |           |            |
|----------|-----------|------------|
| ① 大河内与一  | ⑤① 木塚岩次郎  | ⑩① 青地市右衛門  |
| ② 川上不羨   | ⑤② 横田平学   | ⑩② 酒井門大夫   |
| ③ 神戸甚右衛門 | ⑤③ 鶴沢勇馬   | ⑩③ 祐乘坊元東   |
| ④ 鳥田友之助  | ⑤④ 原田寿太郎  | ⑩④ 谷城之助    |
| ⑤ 大野愛之助  | ⑤⑤ 村瀬登    | ⑩⑤ 笠井官蔵    |
| ⑥ 竹内申吾   | ⑤⑥ 藤田泰蔵   | ⑩⑥ 松崎祐吉    |
| ⑦ 戸塚小十郎  | ⑤⑦ 江本岩蔵   | ⑩⑦ 手島右源太   |
| ⑧ 富沢門弥   | ⑤⑧ 根井早太   | ⑩⑧ 都筑新之丞   |
| ⑨ 稲垣奎允   | ⑤⑨ 田中釜次郎  | ⑩⑨ 斎藤太蔵    |
| ⑩ 鷺見房太郎  | ⑥① 鈴木園右衛門 | ⑩⑩ 近藤      |
| ⑪ 土方留之助  | ⑥② 庵地彦五郎  | ⑩⑪ 二見善大夫   |
| ⑫ 鈴木源左衛門 | ⑥③ 柿崎伊八郎  | ⑩⑫ 南條弥左衛門  |
| ⑬ 大野久太夫  | ⑥④ 鈴木五郎作  | ⑩⑬ 谷井林蔵    |
| ⑭ 田中右膳   | ⑥⑤ 小野順蔵   | ⑩⑭ 箱根粒五郎   |
| ⑮ 浜島太郎作  | ⑥⑥ 高見沢蔵次郎 | ⑩⑮ 二木勘之助   |
| ⑯ 清水要人   | ⑥⑦ 原田次郎太夫 | ⑩⑯ 石川治兵衛   |
| ⑰ 浜島鮫之助  | ⑥⑧ 森下楯之助  | ⑩⑰ 加藤瀬兵衛   |
| ⑱ 五十川長   | ⑥⑨ 稲垣名兵衛  | ⑩⑱ 高柳源七    |
| ⑲ 杉山政之助  | ⑥⑩ 丸山貫太郎  | ⑩⑲ 黒沢郷助    |
| ⑳ 勝見織之丞  | ⑥⑪ 雨宮彰之助  | ⑩⑳ 石井官次    |
| ㉑ 久米延蔵   | ⑥⑫ 内野繁太郎  | ⑩㉑ 入江甚之丞   |
| ㉒ 五十川鈍郎  | ⑥⑬ 秋山吉兵衛  | ⑩㉒ 松山立亭    |
| ㉓ 服部純平   | ⑥⑭ 山下庫太   | ⑩㉓ 近藤直記    |
| ㉔ 別所彦四郎  | ⑥⑮ 原川直左衛門 | ⑩㉔ 堀江源五右衛門 |
| ㉕ 吉田喜左衛門 | ⑥⑯ 程田玄一郎  |            |
| ㉖ 大岡亀寿   | ⑥⑰ 毛利釵之助  |            |
| ㉗ 水野助左衛門 | ⑥⑱ 梅村四郎兵衛 |            |
| ㉘ 土方菫    | ⑥⑲ 山崎代右衛門 |            |
| ㉙ 土方桃太郎  | ⑥㉑ 榊原八郎次  |            |
| ㉚ 森源吾    | ⑥㉒ 石橋清三郎  |            |
| ㉛ 草間小太夫  | ⑥㉓ 松村亀郎   |            |
| ㉜ 神谷友右衛門 | ⑥㉔ 伊庭丈之助  |            |
| ㉝ 加藤小右衛門 | ⑥㉕ 田中健三郎  |            |
| ㉞ 平林久兵衛  | ⑥㉖ 藤重有右衛門 |            |
| ㉟ 金沢八郎   | ⑥㉗ 柴田令輔   |            |
| ㊱ 大須賀一郎  | ⑥㉘ 山田翁輔   |            |
| ㊲ 角田太左衛門 | ⑥㉙ 祐乘坊庸軒  |            |
| ㊳ 鈴木銚之丞  | ⑥㉚ 土屋清蔵   |            |
| ㊴ 平林隆左衛門 | ⑥㉛ 遠山瑞碩   |            |
| ㊵ 鈴木男也   | ⑥㉜ 雑色鉄之助  |            |
| ㊶ 小高     | ⑥㉝ 秋山六郎兵衛 |            |
| ㊷ 竹内亥三郎  | ⑥㉞ 深美勘四郎  |            |
| ㊸ 橋本辰之助  | ⑥㉟ 多田紋右衛門 |            |
| ㊹ 島津恂堂   | ⑥㊱ 福岡十左衛門 |            |
| ㊺ 三浦小平太  | ⑥㊲ 戸塚彦介   |            |
| ㊻ 望月英助   | ⑥㊳ 中山常右衛門 |            |
| ㊼ 栗原与助   | ⑥㊴ 森貢三郎   |            |
| ㊽ 石川六三郎  | ⑥㊵ 末村伊蔵   |            |
| ㊾ 神戸保之祐  | ⑥㊶ 潮田三郎   |            |
| ㊿ 吉田簡輔   | ⑥㊷ 渡辺要右衛門 |            |

# 菊間藩の人物

明治維新後、駿河国は徳川家（静岡藩）の領地になったため、沼津藩は上総国菊間（現千葉県市原市）に転封され、菊間藩となりました。この時藩の組織・制度が一新され、清新な人材が藩の要職に抜擢されました。大参事三浦千尋、少参事服部純・田辺貞吉らがその幹部です。特に、三河国の飛び地を治める大浜出張所で行われた服部による新政は、庶民のための学校や、住民の衆議機関を設けるなど進歩的・開明的なものでした。一方、藩校明親館には旧幕臣の洋学者本山漸によって洋学局が新設されました。また、手島精一・駒留良蔵など海外へ留学する者、大学南校・陸海軍兵学寮に貢進生として派遣される者などエリートが出ました。



本山漸  
本山漸訓点・明親館蔵版「格物入門」明治2年刊



# 廃藩後・明治・大正期の活躍

明治四年廃藩置県により菊間藩はなくなりました。旧藩士たちはそれぞれ自活の道を求めてその後様々な経歴をたどりました。官途につく者、帰農する者、商売を始める者、サラリーマン化する者、あるいは菊間村に残る者、故郷沼津にもどる者、東京に活路を見出す者、などその後の人生は人それぞれです。まず、官界における出世頭は、何といても手島精一でしょう。彼は東京



田辺貞吉



手島精一



中山長明

工業学校（現東京工業大学）校長を長くつとめ、工業教育の発展に寄与しました。一方、手島の実兄田辺貞吉は民間における出世頭です。住友財閥の支配人をつとめ、共同火災・共同生命・京阪電鉄の社長などとして関西の財界に重き



三浦 徹



尾崎 容



服部綾雄

をなしました。軍人としては、海軍兵学校校長をつとめた本山漸（少将）や中山長明（海軍少将）があげられます。技術者としては、海軍造兵廠の技師を長くつとめた本岡鉦次郎、工部大学校を卒業し工部省や台湾総督府の技師になった杉山輯吉がいます。キリスト教界で活躍した人物が多いのも沼津藩出身者の特色です。プロテスタントでは牧師になった三浦徹・武田芳三郎、ギリシヤ正教では伝教者になった尾崎容・山崎兼三郎らがあり、いずれも静岡県での布教に貢献しました。



御側御用人 鈴木重雄



御納戸 酒井門太夫

沼津市明治史料館

# 企画展 沼津藩の人材

しずおか文化の祭典'89参加



藩主分家(旗本) 水野春四郎



野春四郎付役 田辺四友

1989年8月1日(火)～9月29日(金)

安永6年(1777)から慶応4年(1868)まで、90年間にわたり、存続した沼津藩(水野氏)は、5万石の小藩でしたが、その家臣団の中には、優れた人物が少なくありませんでした。今回の企画展では、藩政・学問・武道・芸術などの各方面に足跡を残した沼津藩士を中心に、転封後の菊間藩時代や廃藩後明治・大正期に至る活躍も含め紹介します。

## 関連事業 歴史講座「沼津藩の人材」

※時間はいずれも 14:00～16:00

- 8月6日(日) 平野日出雄氏(フリーライター) 「沼津藩草創期の家臣たち」
- 8月13日(日) 道家 達将氏(茨城大学教授) 「工業教育の父-東京工業大学をつくった-手島精一」
- 8月20日(日) 土屋 重朗氏(医学史研究者) 「沼津藩の藩医たち」
- 8月27日(日) 秋山 繁雄氏(元明治学院大学史料室) 「沼津藩出身のキリスト者・三浦徹と服部綾雄」
- 9月3日(日) 館学芸員のスライドによる解説 「沼津藩士の群像」

同時開催 沼津市歴史民俗資料館特別展 8月1日(火)～10月1日(日)



## 重臣から軽輩まで

沼津藩の家臣は、時代により増減があったと思われませんが、明治四年菊間藩廢藩時には六百四十四戸ありました。身分制度・門閥制度で凝り固まった当時の封建社会では、藩士の中も家格・禄高・役職などで上下関係がきつちりと分けられていました(馬廻席以上の上士は百三十余戸、小役人席以上の中下士は二百三十余戸、職人席以下の軽輩は二百七十余戸)。家臣で最高の地位は家老であり、ほぼ土方家が世襲しています。その下に藩の閣僚ともいえる年寄が数名置かれていましたが、こちらも清水・五十川・浜島・水野・鈴木・杉山・黒沢といった一部の家に限られていました。文政から天保期に老中として幕政に実権をふるった二代藩主水野忠成を補佐した家老土方縫殿助のように日本史上に名を残す活躍をした者もあります。しかし、藩主の側近くで活躍した者以外に、藩政の末端で様々な仕事に従事した多くの家臣が(さらにその下には被支配者たる領民が)いたのです。



水野助左衛門(?)肖像  
年寄役をつとめた  
重臣のひとり

## 武術家たち

沼津藩は、初代藩主水野忠友自らが武芸を尊んだこともあり、優秀な武術教師が召し抱えられていました。剣術では心形刀流の伊庭尺之助、直心影流の山下林右衛門、神道無念流の小野房精、鏡心明智流(江戸の同流宗家桃井春蔵直正は沼津藩士田中氏の出身)の広瀬坦、槍術では深美勘四郎・谷城之助・井出源次郎、弓術では日置流伴道雪派の原田栗生、馬術では大坪流の堀江源五右衛門といった達人がいました。

また沼津藩の武道で特に注目すべきものに柔術があります。揚心流の宗家戸塚彦介英俊は沼津藩の柔術師範として多くの門弟を育成し、幕末には幕府講武所の教授にもなりました。その門下からは、柏崎又士郎・藍沢勝之・都築弘・毛利釧平・天明力松といった達人が輩出しました。



戸塚彦介英俊

## 儒学者

二代藩主忠成のとき沼津城二の丸に藩校(吟式館)が設立されました。漢学教授には、島津東陽(逸齋・維峻、皆川淇園門下)・島津恂堂(得山・維範、海保漁村門下)・島津元圭(維章、同上)・駒留陋齋・今井篤平・高柳邦・岩城魁(塩谷岩陰門下)・渡辺孝・草間学・五十川静・二木幹・村瀬登・本田豊といった人々がいました。

幕末文久年間、七代藩主忠誠は、藩校を明親館と改名し、出羽国の浪人学者阿部千万多(誠藏)を招聘して学制改革をはかりましたが、学派を異にする反対派に阿部が襲われるという事件が起こり、改革は中断しました。



高柳 邦



岩城 魁



阿部千万多

## 洋学者

幕末になると沼津藩でも、伝統的な漢学のみならず、蘭学や英学といった西洋の語学や学問を学ぶ藩士も出現しました。特に伊豆の海防に従事する関係上、葦山代官江川英龍(坦庵)に入門して高島流砲術を学んだ藩士の存在は注目されます。三浦千尋(葦山塾塾頭をつとめる)・服部純・宮山千之助・稲垣源次兵衛らがそれです。彼らが学んだ知識に基づき、沼津藩の軍制は洋式化されていったといえます。また洋学の浸透は軍事の分野だけでなく医学や語学の面でもみられました。深沢要橋は幕府の開成所、佐々木定静・鷲見謹吾は慶応義塾、駒留良蔵は村上英俊塾に学び、そして英学への修められました。



三浦千尋



服部 純



深沢要橋

## 漢医の人びと

藩の中には藩主を治療する奥医師以下、幾つかのランクにわけられた医師がいました。旧来の漢方医としては、祐乗坊・中村・島津・遠山などといった家がありました。学統としては、島津恂堂が多紀元堅門、中村元敬が華岡青洲門、中村元敬が吉益南涯門です。中村元敬は「種痘辨」を著し、蘭方医による種痘に反対を唱えた人です。島津氏は医者であると同時に儒者でもあり藩校でも教えたことは前述の通りです。このような伝統的な漢方医に対し、新しく登場してきたのが蘭方医です。吉田長淑門下の程田玄悦、地方洪庵の適塾に学んだ深沢雄甫文温、適塾や坪井信道・広瀬元恭にも学んだ柳下立達、三宅良齋門下の島津元圭、といった人々がそれです。



島津東陽

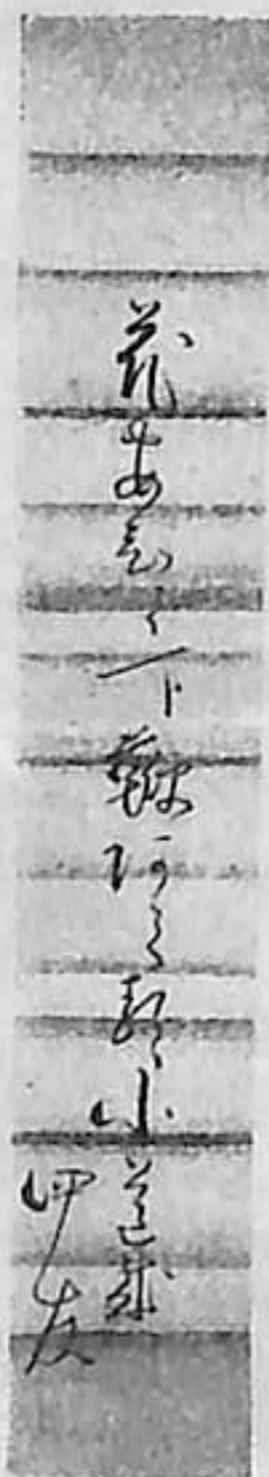


深沢雄甫文温

新田両派の藩医の間でどのような葛藤があったのかは不明ですが、種痘の普及などを通じて幕末には蘭方医の優位が確立していたようです。

## 文人たち

歴代の藩主が、書や画、茶道、和歌、能などに長じていたこともあり、家臣の中にも多彩な趣味を持つ人物が少なくありませんでした。茶道では、江戸千家流の祖川上不自の門人川上不自(師と同名が茶頭として召し抱えられていますが、以下に紹介するのは職務とは関係なくあくまで個人の趣味として楽しんだ人々です。まず画人では、谷文晁の門下だったといわれる鈴木謙齋があげられます。和歌では、伊豆の国学者竹村茂雄の門人加藤円蔵英清、伊勢の国学者鬼島広蔭の門人加藤善右衛門などがいます。狂歌では矢田圓司(正純)・湯山儀四郎(紀安丸)といった人物がいました。また俳諧は藩士の間では特に盛んだっただけなく、中でも山崎正處・田辺四友の二人は、宗匠として江戸で名を成し、明治以後も活躍しました。



花あひて一ト鞭あてる小道成

四友



壺中庵夢鷲こと  
山崎正處肖像

瑤草庵四友こと  
田辺四友 短冊